２．教育学部・人間環境学研究院

Ⅰ　教育学部・人間環境学研究院の研究目的と特徴・・２－２
Ⅱ　「研究の水準」の分析・判定・・・・・・・・・・・・２－４
分析項目Ⅰ　研究活動の状況・・・・・・・・・・・・２－４
分析項目Ⅱ　研究成果の状況・・・・・・・・・・・・２－22
Ⅲ　「質の向上度」の分析・・・・・・・・・・・・・・・２－38

Ⅰ　教育学部・人間環境学研究院の研究目的と特徴

１．研究目的

本研究院は、本学学術憲章及び「世界最高水準の卓越した学術研究」の推進を掲げた「本学中期目標」に則り、「人間環境学研究院の理念」である地球規模でますます複雑に多様化する人間と環境に関わる諸問題に適切かつ多面的に対処するための知の枠組みの創出を目的としている。そのために「各専門領域・分野のさらなる深化」を図ると同時に「学際性」等の「新領域研究」を推進し、活発な国際交流や「海外の諸地域の人間生活や都市環境問題解決への貢献」を通し、時代や世界をリードする国際的・先端的研究拠点を目指す。

２．研究成果に関する方針（OP、アウトカム・ポリシー）

学術面では、個々の専門分野における卓越した研究成果を発信し続けるとともに、従来の研究分野の境界を越えた研究成果を促すため、異なる分野の研究者相互の連携を刺激・促進する「マンスリー学際サロン」、「多分野連携プログラム」、「萌芽的学際研究助成」等の独自の取組に注力する。社会面では、海外での問題解決型フィールド調査や、部局中期目標にあるコミュニティ・地域産業と連携した研究による「地域への貢献」や研究成果の「社会的還元」に力を入れる。

３．研究組織運営に関する方針（MP、マネジメント・ポリシー）

上記目的遂行のために、「住まい」「集い」「つながりあう」ヒト固有のあり方にとっての環境＝人間環境という問題関心を共有する研究分野を結集し、専門性に基づき都市・建築学部門、人間科学部門、教育学部門の３部門を配置する（資料１）。各部門において、個別の専門分野の基準に準拠した研究の質を保証し、高度の専門性を追求すると同時に、「教育研究コーディネータ委員会」によるコーディネータ活動や上記２で言及した独自の取組を通じて、分野を超えた研究者による学際的共同研究の活性化を図り、学際性を担保する。こうした取組の内容、各部門の研究成果は逐次、部局ウェブページ、各部門専攻で発行する情報誌、英文誌等を通じて発信する。

４．研究基盤整備に関する方針（IP、インフラストラクチャー・ポリシー）

研究環境の整備、大型図書などの充実、実験設備の充実更新などを通して、研究基盤の整備に努める。また文部科学省科学研究費を初めとする外部資金への応募・獲得を促し、そのための支援の仕組みも整備する。

以上の研究目的と特徴は、本学の中期目標記載の基本的な目標「研究においては、卓越した研究者が集い成長していく学術環境を充実させ、世界的水準での魅力ある研究や新しい学問分野・融合研究の発展及び創成を促進する。また、環境・エネルギー・健康問題等人類が抱える諸課題を総合的に解決するための研究を強力に推進し、国際社会・国・地域の持続可能な発展に貢献する。」を踏まえている。

［想定する関係者とその期待］

本研究院は非常に幅広い専門分野を含む点に特徴があり、教員が所属する学会等は多岐に渡る。これら数多くの学協会からは、論文発表、各種研究委員会への参画、会議の開催、成果物の刊行、学会等の運営などが期待される。

地域社会からは、福岡県内を始め九州・山口各地で、乳幼児の発達支援、小中高校の児童・生徒への心理リハビリテーション、及び青年から老年までの心の健康づくりや生涯学習への貢献が期待される。また、各地の小中高校から教員の資質向上策について提言や助言が期待される。また、建材関係（木材、コンクリート、鉄骨）の諸団体、建築関係団体

（日本建築家協会、日本建築事務所協会など）、ボランティアの市民団体などから、技術の発展、景観保全、町づくりなどについて助言や調査を求められている。また、地震や台風の被害に対して被害調査や対策の提案が期待される。

本研究院は、主に厚生労働省、文部科学省、国土交通省と関連があり、各省からは様々な研究の受託や各省の施策への協力や意見などが求められている。また、九州の各県や各市町村からカウンセリング、健診システム、教員評価、都市計画、防災計画、文化財調査などの研究の受託や政策立案への意見を期待される。

国際面では、中国や韓国を始めアジアの多数の大学（清華大学、同済大学、チャンゴン国立大学など）、米国や欧州の大学（カリフォルニア大学、ブリティッシュコロンビア大学、ミュンヘン工科大学など）から、心理学、臨床心理学、社会学、人類学、教育学、都市建築学、健康科学の各分野及びこれらの学際分野での共同研究の推進と研究成果の共有が期待されている。また、国連ハビタット・アジア太平洋事務局を始めとしてアジア各国から人間と環境の理解の深化と居住状況の改善への貢献が期待される。

○資料１　各部門の専門領域の概要

部門	専門領域の概要
教育学部門	教育学部門は、人間環境（人が生を営む世界）において、そこで実践される社会的・文化的継承性と社会的協働性、身体や心など、ミクロな関係性やその形成、変化に焦点をあてつつ、同時に、それを支える人間環境そのもの、すなわち制度、文化、慣習など、歴史的、社会的、政治的、経済的なマクロな社会構造、社会システムの在りようと、その両者の関係構造を解明すべく、諸領域の研究者から構成されている。 教育学は、教育、すなわち人を教え、育み、また学び、育つ営みを、学校や家族だけではなく、それをとりまく社会的、国際的視座の下で、哲学、社会学、歴史学、人類学、情報科学といった諸科学の方法論により究明する、教育についての包括的・学際的学問である。 地域社会からグローバル世界にわたる視座のもと、学校や教室内の関係、親子関係など微視的関係性、教育に関わる制度を含む社会システムへの巨視的構造、また教育達成や選抜に関する家族や社会の機能、教育と労働を結ぶ職業教育の現状と課題、乳幼児や高齢者をも含んだ人間の福祉や学びの制度や諸関係など、教育をめぐる現代的、社会的課題についての科学的分析、それを導いた歴史的社会的基盤についての究明を進めている。
人間科学部門	人間の心や行動、他者とのやりとり、集団や社会・文化を科学的に探究すると同時に、人間が直面するさまざまな現実の問題を発見・理解しその解決方策や支援法を開発するために、共生社会学、心理学、臨床心理学、健康行動学の視座からのアプローチによる研究や実践活動を通じて、さまざまな知識や理論の構築及び技法の開発を目指す。各研究者の自由な活動を基盤にしつつ、また相互に協同しつつ、個人、家族、コミュニティや社会、文化、環境に渡るあらゆる人間活動やシステムの在り方、その成立・変容過程を理解するために様々なアプローチを多面的に展開することで、包括的な人間観・社会観の構築を図る。
都市・建築学部門	都市・建築学部門は、建築から都市に至るまでの広い領域について、共生社会の空間環境を総合的にデザインする研究分野を担っており、計画環境系講座と構造防災系講座の二つの大講座によって構成されている。計画環境系講座には、建築計画学、建築環境学といった建築学の基幹をなす分野だけでなく、都市計画学系と心理学系の教員が協働するアーバンデザイン学を専門とする教員が所属しており、建築から都市までの広い領域のデザインと環境、さらにそれらと人との関わりについて教育研究を行っている。一方、構造防災系講座には、建築構造学、都市災害管理学を専門とする教員が所属しており、都市を襲う地震や台風などの自然災害への対応やそれらの自然災害に耐えうる建築構造技術、建築を構成する材料とその施工技術などに関する教育研究を行っている。

Ⅱ　「研究の水準」の分析・判定

分析項目Ⅰ　研究活動の状況

観点１－１　研究活動の状況

（観点に係る状況）

１－１－（１）　論文・著書等の研究業績や学会での研究発表の状況

査読付学術雑誌論文数については、教員（65 名）一人あたり、平均 1.7 編であり、学術論文全体では平均 2.4 編である。また、著書では平均 40 編、学会発表に関しても平均で国際が 30 件弱、国内が 300 件以上の発表を行っている。本研究院には、研究成果をある程度まとまった段階でまとめる傾向にあり、他の分野と比べて論文数の少ない文系教員が 65%程度いることを考慮すると安定した研究発表状況にあり、国際学会での発表も増加傾向であることから、専門分野における卓越した研究成果を発信し続けるという研究成果に関する方針に従って活動していると言える（資料２）。

○資料２　研究発表状況（件数）

種類	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平均	教員一人あたり
査読付学術論文	114	133	127	125	90	81	112	1.7
査読無し学術論文	59	50	46	35	29	45	44	0.7
学術論文全体	173	183	173	160	119	126	156	2.4
著書	44	49	40	53	34	34	42	0.7
国際会議・学会発表	23	28	21	16	40	38	28	0.4
国内会議・学会発表	346	347	283	342	257	304	313	4.8

１－１－（２）　研究成果による知的財産権の出願・取得状況

平成22年度に都市・建築学部門の古賀靖子准教授が天窓により導入された昼光による室内照度のシミュレーション方法、平成24年度に同じく都市・建築部門の山口謙太郎准教授のグループが制震構造に関する特許を取得しており、論文などとは異なる形態での研究成果が出ている。

１－１－（３）　競争的資金受入状況、共同研究受入状況、受託研究受入状況、寄附金受入状況、寄附講座受入状況

科学研究費補助金の受入状況は、教員（65 名）一人あたりの採択率が平均 80%、金額が 189 万円、部局全体では平均 52.2 件、平均額は 1 億 2,250 万円と高い水準にある（資料３）。採択された研究課題内容は極めて多岐にわたっており、多様な研究分野からなる本研究院の特色をよく反映している（資料４）。

その他競争的資金受入状況は、平均 5.1 件、平均額は 681 万円（資料５）、共同研究は、平均４件、平均額は 1,633 万円（資料６）、受託研究は平均 11 件、平均額は 4,427 万円（資料７）、寄附金は平均 23.5 件、平均額は 3,194 万円（資料８）であり、科研費以外の受入

件数や金額ともに安定して高く、研究に対する外部からの評価が高いと言える。また、寄附講座受入額は、平成 25～27 年度各 1,700 万円であり、この講座の設置により大学・短大・専門学校等の第三段階教育の構造・機能・質保証に係る研究並びに教育を強化した（資料 9、10）。

以上の科学研究費、その他競争的資金、受託研究、共同研究、奨学寄附金、寄附講座の外部資金獲得総計は、13 億 8,209 万円であり、文理横断学際組織としては高い水準にある。また、これらの間接経費の一部は院長裁量経費に組み込まれ、研究環境の向上等に充てられており、実験設備の充実更新という研究基盤整備に関する方針に沿って経費を活用している。

○資料３　科学研究費補助金受入状況

受入件数

種目	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平均	教員一人あたり
新学術領域研究	1	1	0	0	0	0	0.3	0.5%
基盤研究 A	2	1	1	1	1	1	1.2	1.8%
基盤研究 B	11	11	11	10	11	18	12.0	18.5%
基盤研究 C	21	21	20	21	25	25	22.2	34.2%
挑戦的萌芽研究	3	5	4	6	5	5	4.7	7.2%
若手研究 A	0	0	0	0	0	1	0.2	0.3%
若手研究 B	7	12	9	12	8	11	9.8	15.1%
特別研究促進費	0	0	1	0	0	0	0.2	0.3%
研究活動ｽﾀｰﾄ支援	3	1	2	2	1	1	1.7	2.6%
合計	48	52	48	52	51	62	52.2	**80.3%**

受入金額（千円）

種目		平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平均
新学術領域研究	直接経費	7,300	7,200	0	0	0	0	2,417
	間接経費	2,190	2,160	0	0	0	0	725
	合計	9,490	9,360	0	0	0	0	3,142
基盤研究 A	直接経費	17,500	7,900	4,000	8,800	6,600	7,600	8,733
	間接経費	5,250	2,370	1,200	2,640	1,980	2,280	2,620
	合計	22,750	10,270	5,200	11,440	8,580	9,880	11,353
基盤研究 B	直接経費	42,300	42,600	43,300	37,600	43,100	36,000	40,817
	間接経費	12,690	12,780	12,990	11,280	12,930	10,791	12,244
	合計	54,990	55,380	56,290	48,880	56,030	46,791	53,060
基盤研究 C	直接経費	22,700	21,600	22,600	22,100	30,200	24,228	23,905
	間接経費	6,810	6,480	6,780	6,630	9,060	6,900	7,110
	合計	29,510	28,080	29,380	28,730	39,260	31,128	31,015
挑戦的萌芽研究	直接経費	3,000	4,200	4,200	5,600	4,700	4,100	4,300
	間接経費	0	1,260	1,260	1,680	1,410	1,230	1,140
	合計	3,000	5,460	5,460	7,280	6,110	5,330	5,440
若手研究 A	直接経費	0	0	0	0	0	6,000	1,000
	間接経費	0	0	0	0	0	1,800	300
	合計	0	0	0	0	0	7,800	1,300
若手研究 B	直接経費	7,700	13,100	9,800	13,100	6,400	9,399	9,917
	間接経費	2,310	3,930	2,940	3,930	1,920	2,400	2,905
	合計	10,010	17,030	12,740	17,030	8,320	11,799	12,822
特別研究促進費	直接経費	0	0	12,781	0	0	0	2,130
	間接経費	0	0	0	0	0	0	0
	合計	0	0	12,781	0	0	0	2,130
研究活動ｽﾀｰﾄ支援	直接経費	2,910	1,140	2,200	2,000	1,100	1,000	1,725
	間接経費	873	342	660	600	330	300	518
	合計	3,783	1,482	2,860	2,600	1,430	1,300	2,243

合計	直接経費	103,410	97,740	98,881	89,200	92,100	88,327	94,943
	間接経費	30,123	29,322	25,830	26,760	27,630	25,701	27,561
	合計	133,533	127,062	124,711	115,960	119,730	114,028	122,504
	教員一人あたり	2,054	1,955	1,919	1,784	1,842	1,754	1,885

○資料４　科学研究費補助金による大型研究一覧

年度	研究種目	課題番号	研究代表者	研究題目	交付金合計（千円）
平成21～23年度	新学術領域	21200003	古賀 靖子	非イメージ形成の視覚機能の探求と健康に寄与する光環境デザインへの展開	29,640
平成24年度	特別研究促進	24900001	前田 潤滋	平成24年５月６日に北関東で発生した竜巻の発生メカニズムと被害実態の総合調査	16,615
平成21～24年度	基盤（A）	21243044	吉本 圭一	非大学型高等教育と学位・資格制度に関する研究	15,470
平成25～29年度	基盤（A）	25245077	吉本 圭一	キャリア・職業教育による高等教育の機能的分化と質保証枠組みに関する研究	44,330
平成20～24年度	基盤（B）	20330153	三浦 佳世	印象、知覚、意識を包含した心的時間についての複合処理モデルの構築	5,200
平成27～30年度	若手（A）	15H05398	實藤 和佳子	縦断研究による自閉症スペクトラムの障害発生機序の解明	28,210
平成21～23年度	基盤（B）	21330153	大神 英裕	乳幼児期における社会的認知の発達と障害に関するコホート研究	5,200
平成23～25年度	基盤（B）	23330160	安立 清史	介護職の役割と機能に関する比較社会学的研究：介護職のガラパゴス化状況からの脱却	16,900
平成23～25年度	基盤（B）	23330197	山口 裕幸	集団の心理的創発特性の可視化による的確なチーム・マネジメント方略に関する研究	14,040
平成23～25年度	基盤（B）	23330205	丸野 俊一	創造的学びや共感性を育む子ども主体の対話型教育の開発と支援	15,600
平成24～26年度	基盤（B）	24330193	大神 英裕	社会的認知の発達と障害に関するコホート研究	17,030
平成24～26年度	基盤（B）	24330218	増田 健太郎	対人援助職の実践力養成プロセスの分析とバーンアウト予防の学際的研究	13,780
平成26～28年度	基盤（B）	26280049	橋弥 和秀	「わたしたち」の起源：自己概念の拡張とその心理基盤の発達に関する多角的検討	10,670
平成26～30年度	基盤（B）	26284137	飯嶋 秀治	施設間移行と生存経路多様化の基礎的研究	12,600
平成26～28年度	基盤（B）	26285113	安立 清史	介護保険改革へのNPO・社福法人等の対応と再編成モデルの形成に関する社会学的研究	14,240
平成26～28年度	基盤（B）	26285145	山口 裕幸	成員間の「暗黙の協調」を促進し全体的連動を創成するチーム・マネジメントの研究	12,250
平成20～23年度	基盤（B）	20360274	竹下 輝和	郊外戸建住宅地の住宅管理システムの開発研究	15,990
平成21～23年度	基盤（B）	21360227	赤司 泰義	ハビタットシステムの未来シナリオと環境負荷削減可能量に関する研究	3,250
平成22～	基盤（B）	22390229	河野 昭彦	内蔵鉄筋を利用した CFT 接合部	16,820

24年度				の開発	
平成22～24年度	基盤（B）	22360230	前田 潤滋	台風・竜巻等のスーパー突風による建物の風荷重の増大インパク	17,810
平成23～25年度	基盤（B）	23404023	趙 世晨	近代都市文化遺産としての「日本租界」の再評価に関する実地調査	12,480
平成23～26年度	基盤（B）	23360249	山口 謙太郎	炭素固定に有効な解体材活用・建物制震システムの開発研究	18,590
平成24～27年度	基盤（B）	24360237	古賀 靖子	光放射の視覚的・非視覚的作用の評価と固体照明環境デザイン	18,070
平成24～27年度	基盤（B）	25303025	堀 賀貴	リバースエンジニアリングとしての建築史学、古代ローマ遺跡のソースコードを読み解く	16,900
平成25～27年度	基盤（B）	25289197	尾崎 明仁	恒温恒湿性能を備えた自然エネルギー利用パッシブ住宅の開発と住環境評価に関する研究	17,940
平成25～27年度	基盤（B）	25289186	河野 昭彦	津波漂流物を対象とした CFT 構造の耐衝撃性能の解明と評価法の開発	17,940
平成26～28年度	基盤（B）	26282112	前田 潤滋	竜巻通過時に急変する風速と気圧降下との相乗効果による建物の破損プロセス	16,120

○資料５　その他競争的資金受入状況

競争的資金の種別	平均	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
九州大学次世代スーパースター養成プログラム（SSP）	件数	1					
	金額（千円）	8,000					
九州大学研究プログラム・研究拠点プロジェクト（P&P）	件数				1	1	
	金額（千円）				1,149	1,125	
ヤマハ発動機スポーツチャレンジ研究助成	件数					1	
	金額（千円）					1000	
笹川スポーツ研究助成	件数						1
	金額（千円）						988
「鋼構造研究・教育助成事業」による「一般テーマ研究助成」	件数		1	1	1	1	
	金額（千円）		1,750	1,750	1,800,	1,800	
事業継続等の新たなマネジメントシステム規格とその活用等による事業競争力強化モデル事業	件数				1		
	金額（千円）				分担金不明		
セコム科学技術振興財団、準備研究助成	件数						1
	金額（千円）						8,000
トステム財団研究助成	件数		1				
	金額（千円）		1,000				
一般財団法人　住総研	件数				1	1	
	金額（千円）				分担金不明	分担金不明	
京都大学防災研究所一般共同研究	件数	1	1		1	2	1
	（千円）	1,220	1,220		982	2,375	1,393
九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト	件数	1					
	金額（千円）	3,880					

国土交通省 建設技術研究開発助成		件数					1	1
		金額（千円）					分担金不明	分担金不明
財団法人マツダ財団		件数	1	1	1			
		（千円）	250	250	200			
鹿島学術振興財団研究助成		件数			1	1		
		金額（千円）			1,350	1,300		
独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構「太陽熱エネルギー活用型住宅の技術開発」		件数					1	1
		金額（千円）					分担金不明	分担金不明
合計	件数	5.1	5	4	3	6	8	5
	金額（千円）	6,805	13,350	4,220	1,350	5,231	6,300	10,381

○資料６　共同研究受入状況

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平均
件数	3	3	3	3	7	5	4
金額（千円）	21,019	16,808	13,550	9,620	17,908	19,092	16,333

○資料７　受託研究の受入状況

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平均
件数	9	8	7	15	14	13	11
金額（千円）	23,282	23,421	19,795	61,600	55,216	82,312	44,271

○資料８　寄附金受入状況

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平均
件数	23	23	23	24	21	27	24
金額（千円）	19,000	28,386	17,273	39,955	39,095	47,903	31,935

○資料９　寄附講座受入状況

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
件数	0	0	0	1	1	1
金額（千円）	0	0	0	17,000	17,000	17,000

○資料10　寄附講座概要

寄附講座名	概要
滋慶学園グループ、寄附講座・第三段階教育論講座. 吉本圭一	大学・短大・専門学校等の第三段階教育の構造・機能、質保証に係る研究並びに教育を行う。特に、（１）卒業生等を通した学習成果にもとづく教育の点検・評価、教職員の資質とその向上のための制度・組織、教育の点検・評価から教育改善へのサイクルの研究教育。（２）教育資格・職業資格の国際的通用性に関する研究教育に焦点をあてる。

１－１－（４）　競争的資金による研究実施状況、共同研究の実施状況、受託研究の実施状況

科研費による研究では、「キャリア・職業教育」、「社会的認知発達と障害」、「健康に寄与する光環境デザイン」といった本研究院の専門領域の特徴を生かした中核的あるいは先端的研究を行っている。また基盤（B）では、多分野横断的、学際的な研究も含まれている（資料 11)。その他競争的資金では「障害者アスリート」、「古代ローマ帝国の防災・防犯」研究（資料 12）を、共同研究では「送電用鉄塔の耐風性能向上」、「通風による住宅温度自

動最適管理法」といった産学共同研究（資料 13）を、受託研究では、「キャリア教育」や「校長等リーダー養成」といった文部科学省、自治体、地域との連携した研究（資料 14）を行い、知識の社会的還元を意識した活動も活発に行っている。

○資料 11　競争的資金による研究の実施状況

競争的資金	研究実施状況
基盤研究（A） （平成 21～24 年度） 「**非大学型高等教育と学位・資格制度に関する研究**」 吉本 圭一 直接経費：34,700,000 間接経費：10,410,000	本研究は、「非大学型高等教育」としての短期大学・専門学校などに焦点をあて、これらの機関における教育プログラムの特質を「統制と調整の主体」、「教育の目的・目標」、「教育の方法」の３つの観点から検討し、大学の学術型アプローチと対比しながら職業教育型アプローチの固有性を実証的に解明しようとした。また、政策科学的研究として、非大学型制度の社会的認知と質保証に係る国家的学位・資格枠組みの可能性を探究した。
基盤研究（B） （平成 20～24 年度） 「印象・知覚・意識を包含した心的時間についての複合処理モデルの構築」 三浦 佳世 直接経費：11,300,000 間接経費：3,390,000	本研究の目的は、時間に関する知覚、印象、意識を相互連関的に捉え、心的時間の表象形成メカニズムを明らかにすることである。実験心理学の手法を駆使し、視覚、聴覚、視聴覚相互作用、視覚運動協応を対象に、時間知覚、時間印象、及びそれらに関わる意識（意識の時間相を含む）の研究を行い、心的時間の包括 モデルを提出した。こうした成果は心的時間の生起メカニズムに関する理解を深めただけでなく、時間研究に新たな枠組を提供するものとなった。
基盤研究（B） （平成 24～26 年度） 「対人援助職の実践力養成プロセスの分析とバーンアウト予防の学際的研究」 増田 健太郎 直接経費：10,600,000 間接経費：3,180,000	対人援助職の先行研究を行い、医師・看護師・臨床心理士・保育士・教師各５名ずつ面接調査を行い、質問紙調査を行った。その面接調査をもとに質問紙を作成し、医師・看護師・臨床心理士・教師・保育士・社会福祉士など計 1800 名の質問紙調査を行った。また、フィンランド・スイス・アメリカ（ニューヨーク）の海外研究を行い、日本とのシステムや専門職養成の相違について明らかにした。教育経営学研究紀要において、フィンランドの教員養成課程と教育について論文を公表した。また、教育と医学 13.11 月号のスクールカウンセラーのこれからの課題について、ニューヨーク視察に基づいて、研究の一部を掲載した。臨床心理士養成課程における成長過程を８年間にわたるディベロップメント調査分析を行った。
基盤研究（B） （平成 23～25 年度） 「介護職の役割と機能に関する比較社会学的研究：介護職のガラパゴス化状況からの脱却」 安立 清史 直接経費：13,000,000 間接経費：3,900,000	介護現場における「介護のガラパゴス化」の実態とその原因を探った。「介護」が「ガラパゴス化」する理由として第１に老人福祉法から介護保険法にいたる医療と福祉のせめぎ合い、第２に介護保険による過剰なコントロール、第３に日本の家族や地域社会の自助や共助システムの衰微、第４に社会福祉法人などのサービス提供システムの日本的なあり方等に原因がある。３年間にわたり福岡県老人福祉施設協議会の協力を得て介護職員へのアンケート調査、施設長等へのヒアリング、若手介護職へのフォーカスグループインタビュー等を行い、「介護のガラパゴス化」が介護職の離職・転職とどのように関連しているかを多変量解析して分析してきた。
基盤研究（B） （平成 26～30 年度） 「施設間移行と生存経路多様化の基礎的研究」 飯嶋 秀治 直接経費：4800,000 間接経費：1440,000	本研究は日本の児童養護施設、通所授産施設、野宿者の自立支援施設、臨床心理士が集い、（１）入所者の経年と共にこれら諸施設を移行する「施設間移行」及び「再生産」がどの程度の実態であるのか、（２）そうした施設間移行もしくは再生産以外にどのような生存経路の多様化があり得るのかを海外の事例と比較しつつ実践的に解きほぐして行くための研究である。現在１年半が終了したところである。
若手研究（A） （平成 23～26 年度） 「**生後三年間にわたる社会的認知の発達と障害に関する縦断研究**」 實藤 和佳子 直接経費：19,400,000 間接経費：5820,000	本研究では、生後３年間の社会的認知の定型発達過程とその逸脱について、縦断的かつ実証的に解明することを目的とする。本年度は昨年度に引き続き、発達及び関連要因に関する実験・検査を実施した。今年度は、乳幼児が同種であるヒトに対していつから特異的な注目を向けるのかについて、体系的な検討結果を公表した。具体的には、生後 1 ヶ月児にヒト―サルを対提示し選好注視法で注視時間を測定した。その結果、成体の場合は人種を問わずにヒトを選好したが、幼体の場合にはいずれにも選好がなかった。そこで、同じ実験を３か月児に実施したところ、幼体でも成体でもヒトを選好した。この結果から、ヒトは生まれながらにしてすぐにヒトを注目するのではなく、人への関

	心は発達的に変化していくことを示した。本研究結果は Developmental Psychology 誌に投稿し、受理が決まった。
基盤研究（B） （平成 20～23 年度） 「郊外戸建住宅地の住宅管理システムの開発研究」 竹下 輝和 直接経費：12,300,000 間接経費：3,690,000	本研究では、郊外戸建住宅地における住宅管理システムの構築、活用、運用に関する知見を示した。１）構築については、地番を ID としたデータベース構築の手法を示した。２）活用については、空家、空宅地の属性的特徴、空間的分布、経年変化の実態を把握できることを示した。３）運用については、土地・建物・世帯に関する情報更新の実態などについて把握した。また、分析結果の一部を対象自治体への提供資料として活かすことで社会的な有用性を実証できた。
新学術領域研究 （平成 21～23 年度） 「**非イメージ形成の視覚機能の探求と健康に寄与する光環境デザインへの展開**」 古賀 靖子 直接経費：22,800,000 間接経費：6,840,000	概日リズムの光同調や瞳孔の対光反射を生じさせる非イメージ形成の視覚の分光感度を調べた。その分光感度曲線は、内因性光感受性網膜神経節細胞と錐体視細胞の光受容により二峰性になることが示唆された。イメージ形成・非イメージ形成の視覚特性を考慮した分光分布に基づく次世代の光環境デザインの要件は、直射日光の間接的な利用を含む昼光の活用、ハイブリッド照明、時間的空間的な照明制御の統合であると言える。
基盤研究（B） （平成 22～24 年度）　「内蔵鉄筋を利用した CFT 接合部の開発」 河野 昭彦 直接経費：13,200,000 間接経費：3,960,000	鉄筋内蔵の充填コンクリート鋼管（CFT）接合部は、鋼管内面に充填コンクリートに対するずれ止めを設け、鋼管と鉄筋間の応力伝達を可能としている。このため、柱継手では鋼管を溶接せずに鉄筋で応力を伝達できるし、柱脚ではベースプレートも省略できるなど、経済性、施工性が改善する。700 ニュートン級鋼 の普及の妨げは溶接の難しさにあるので、溶接が省略できる本接合部はこの解決策である。本研究は系統的な実験から以上の実用性を証明した。
基盤研究（B） （平成 23～26 年度） 「炭素固定に有効な解体材活用・建物制震システムの開発研究」 山口 謙太郎 直接経費：14,300,000 間接経費：4,290,000	本研究は、建築物の解体材料から発生する二酸化炭素の固定化に有効な、木造建築の解体材を地盤補強や耐震要素に利用する方法と、リユース可能な壁体材料と乾式工法による建物制震システムを開発することを目的として実施した。その成果として、木造建築解体材を地盤に貫入することによる液状化対策技術を提案し、模型振動実験によってその有効性が確認された。また、建築解体材の再利用を想定した木造耐力壁や筋交い架構を考案し、静的水平載荷実験によってその性能が確認された。更に、乾式工法によるコンクリートブロック摩擦制振壁を提案し、動的水平載荷実験や振動台実験によって制振効果が期待できることが確認された。
特別研究促進費 （平成 24～24 年度） 「平成 24 年５月６日に北関東で発生した竜巻の発生メカニズムと被害実態の総合調査」 前田 潤滋 直接経費：12,781,000 間接経費：3,834,300	北関東地方に発生した複数の竜巻による突風被害の実態調査を行って被害情報と被災住民へのアンケートの分析を行った。つくば市を襲った竜巻はフジタスケール 3～4（風速 70～100m/s 前後）に達する国内最大規模であった。市街地が襲われたことによる全壊建物の多さに加えて、べた基礎ごと横転した木造住家や工業団地オフィスの開口部の被害など、新しい被害形態が確認された。住民アンケートの分析結果は竜巻災害対策での行政施策に利用できる。
基盤研究（B） （平成 25～27 年度） 「リバースエンジニアリングとしての建築史学、古代ローマ遺跡のソースコードを読み解く」 堀 賀貴 直接経費：7,200,000 間接経費：2,160,000	４月から６月まで英国 Leverhulme 財団の客員教授として英国ケント大学に赴任、レーザースキャニングの考古学への応用とその実践について連続講義、セミナーを実施した。滞在中にポンペイ研究のレイ・ローレンス教授、及びオスティア研究のルーク・ラヴァン博士と本科研の研究計画及び発展性について 討議を繰り返し行った。また、４月にはオックスフォード大学にてオスティア都市・建築研究のジャネット・ディレーン博士と意見交換をし招待講演を行った。６月にはロンドン大学の公開セミナーでもモザイク研究に関するレーザースキャニング技術応用について招待講演を行い高い評価を得た。９月、10 月にポンペイ、オスティアで調査を行った。ポンペイではスクオレ通り、レジーナ通り、イシデ通りのスキャニングを完了。中央広場からスタビア通りにいたる交通規制の 実態が解明されつつあり、11 月には日本建築学会へ論文を投稿（３月末時点で査読中）。また３月にはポンペイのカプア門付近で出土の獣骨の分析作業を開始、後 62-79 年に獣骨廃棄が集中しており 62 年の震災で発生した廃棄物の処理に深く関連していることが明らかとなった。また、食肉処理のみならず道具としての利用を示す加工の痕跡なども確認された。オスティアにおいてはデクマヌス・マキシムスの東端、西端部でデータの収集を完了

	した。今後の都市形成過程に関する研究の進展が期待される。夏期に予定していた非公開の「ミューズのインスラ」、「ジョーヴェとガニメデの家」の実測調査が遺跡監督所の要請で延期されたため、「カーセ・ア・ジャルディーノ」とよばれるハドリアヌス帝時代の開発地区の実測を開始した。「ミューズのインスラ」について予備調査から得られた成果を２月に日本建築学会へ論文投稿した。一部調査の延期要請にしたがって３月に追加調査を実施し、上記２軒に加えて「黄色い壁のインスラ」の調査も行った。
基盤研究（B） （平成 25～27 年度） 「恒温恒湿性能を備えた自然エネルギー利用パッシブ住宅の開発と住環境評価に関する研究」 尾崎 明仁 直接経費：13,800,000 間接経費：4,140,000	本研究では、自然エネルギーを利用し恒温性と恒湿性を備える高機能パッシブ住宅の設計を目的として、工業建材を主とする最近の乾式住宅にも適用可能な蓄熱と調湿の特性を有する多機能建材を開発している。また、環境試験室における模型実験、試験住宅を使用した屋外実験、及び熱・水分・空気連成を考慮した建築温湿度・熱負荷の数値シミュレーションにより、蓄熱・調湿特性を活用し、太陽熱や外気冷房などの自然エネルギーを利用した恒温恒湿性能に優れる高機能パッシブ住宅の設計指針について検討している。本年度は、相変化熱（PCM）を利用して蓄熱するとともに、優れた吸放湿特性も有する蓄熱・調湿建材を試作し、その温湿度挙動を測定した。また、建築の熱と水分と空気の連成移動を非平衡熱力学に準拠した非線形現象として表現し、建築全体の温湿度変動を予測する数値シミュレーションソフトの開発を進めた。さらに、数値計算により、室内温湿度及び暖冷房負荷を目的変数、建築仕様やライフスタイルなどの影響因子を説明変数としてパラメータ感度解析及び重回帰分析を行い、蓄熱・調湿建材の性能ガイドライン及びそれを有効活用するための設計指針について検討した。建築で起きる熱と水分と空気の複合移動を熱力学に基づき詳細に数理モデル化することで、住環境（室内温湿度及び空調用顕熱・潜熱負荷）の予測精度が格段に向上し、パッシブ・ヒーティング＆クーリング技術などの幅広い検討が可能となる。また、自然エネルギーや壁体の蓄熱・調湿を利用して住環境を制御するパッシブ手法は、今後の住宅に断熱気密性能のみならず恒温恒湿性能を付加することになり、住宅性能の新基準及び新たな住宅構法・仕様の開発に繋がる。

○資料 12　その他の外部資金によるもの

競争的資金	研究実施状況
ヤマハ発動機スポーツチャレンジ研究助成 （平成 26 年度） 「障害のあるトップアスリートの自己変容に及ぼすスポーツドラマチック体験の影響」 内田 若希 予算額：1,000,000	事故や病気による身体機能や身体部位の喪失は、生活の変化や喪失感をもたらす体験である。一方、スポーツ場面で体験される人生の転機ともなるような心に残る体験（スポーツドラマチック体験） は、ときとして選手の人生観や価値観をも変えることになる。本チャレンジでは、量的・質的アプローチにより、どのようにスポーツドラマチック体験を積み重ねることで、自己変容や自己成長が促されるのかを明らかにした。
「鋼構造研究･教育助成事業」による「一般テーマ研究助成」 （平成 23～24 年度） 「段差を有する外ダイアフラム形式角形鋼管柱梁接合部パネルの力学的挙動」 松尾 真太朗 直接経費：3,500,000 間接経費：0	本研究は、鋼構造柱梁接合部を対象とし、左右の梁せいが異なる場合の接合部パネルの耐力・剛性等の力学的挙動を解明し、鋼構造柱梁接合部の設計法の向上を目指したものである。接合形式として外ダイアフラムを対象としている点が、従来の研究にはなく、ここで新たな耐力評価式を導出している。
セコム科学技術振興財団、準備研究助成 （平成 27 年度） 「古代ローマ帝国の防災・防犯マネジメント」 堀 賀貴 直接経費：8,000,000 間接経費：0	古代ローマ帝国の建築・土木技術（モザイクなど室内装飾を含む）は驚異的であり､100m あたり数ミリの高低差だけで数十キロ先から上水を運ぶ技術やパンテオンやコロッセオに代表される 2000 年近くも強度を失わないコンクリートなど、現代を遙かに超えた技術をもつ。これらの技術は解明されていない部分も多く、申請者が用いるレーザースキャニングなど最新の実測技術によって、徐々にその実態が解明されつつある。準備研究では、ポンペイ（ヘルクラネウムを含む）、オスティアという古代ローマを代表する都市遺跡について、その都市、

	建築の三次元的情報（驚くべきことに、これらの遺跡の大部分には立面図すら存在しない）を使って、防災、防犯の視点から都市、建築を読み解くことに着手する。準備研究では、まず建設、土木技術に関連した避難計画や道路計画に防災、防犯の視点が含まれていることを多面的に立証するため、マクロとしての都市災害のシミュレーション（オスティアにおける洪水）、ミクロとしての住宅設備（ポンペイにおける開口部と街路の関係）の両面から、古代ローマの安全・安心技術の存在の可能性を検証する。
京都大学防災研究所一般共同研究 （平成 22～23 年度） 「台風接近時の強風被害予測技術と防災・減災のための準備手順の開発」 前田 潤滋 直接経費：2,440,000 間接経費：0	これまでの台風による強風・高波による被害情報を台風の接近度に合わせてデータベース化し、台風接近に伴う被害の予測情報を自治体に提供 するシステムの開発を目指した。システムは台風接近が予測される地域の避難計画や広報スケジュールに活用でき、リアルタイム防災の実現が期待できる。当該研究期間では、熊本県宇城市で試験運用し、自治体での運用を支援する講習などを行った。

○資料 13　共同研究の実施状況

共同研究	研究実施状況
九州電力株式会社 （平成 23 年度） 「不平均張力荷重の影響評価に関する研究」 前田 潤滋 直接経費：13,122,000 管理費：1,458,000	送電用鉄塔は様々な環境及び架線条件の基に立地しており、超高圧鉄塔を設計するにあたっては、それら環境と架線条件の影響を適切に評価する必要がある。本研究では、鉄塔耐風性能向上のうち、様々な架線条件での不平均張力荷重が部材応力に与える影響を定量的に評価し、超高圧送電鉄塔の鉄塔設計手法を確立するものである。
三協立山株式会社 （平成 26 年度） 「高断熱土壁住宅における温度自動開閉窓の最適制御に関する数値解析」 尾崎 明仁 直接経費：2,750,000 管理費：550,000	建築全体（躯体及び空間）の熱・水分・空気の複合移動を非定常伝熱現象として忠実に再現することにより、高断熱土壁住宅を対象に自然エネルギーや蓄熱･調湿性能を利用したパッシブ･クーリング技術（通風による外気冷房とナイトパージ）の有効性について解析し、通風のための窓開閉の最適自動制御方法を確立した。

○資料 14　受託研究の実施状況

受託研究	研究実施状況
文部科学省「成長分野等における中核的専門人材養成に関する戦略的推進事業」 （平成 25 年度） 中核的専門人材養成のためのグローバルコンソーシアム. 吉本 圭一 直接経費：14,521,005 管理費：1,452,100	九州各地域の多様な産官学関係者、先行専門分野別コンソーシアム関係者等による産官学コンソーシアムの実質化を図り、①学校段階縦断的、学校種横断的、専門分野横断的な、グローバル人材ニーズと必要な諸能力についての協議、職域プロジェクトと連携して、②国際的通用性をもつ職業・高等教育資格枠組みの可能性探究、③双方向統合型国際ネットワークによる学習プログラム開発、④社会人の学び直しを促す学習ユニット積上げ型プログラム開発を進めた。
独立行政法人・教員研修センター （平成 25 年度） 「ケースメソッド開発による次世代スクールリーダー養成の可能性」 元兼 正浩 直接経費：3,390,000 管理費：	本研究はハーバード大学の MBA などで行われているケースメソッドの手法を教頭以下の次世代リーダー層に適用することにより、校長になる以前に最終決断者としての意思決定のトレーニングの可能性ををさぐることを目的とするものである。毎月、九州山口より５県３政令市の指導主事に集まってもらい、ケースづくりを行い、実際に公募型研修を実施した。その成果はケースメソッド入門などの出版物となっている。

１－１－（５）　その他研究目的に沿った研究活動の状況

第２期中期計画期間における本研究院の最も特筆すべき重点研究活動は、部門、専門領域を横断した学際的研究を活性化するための取組である。本学の教育の質向上支援プログラム（EEP）と研究院長裁量経費による学際研究教育コーディネータ委員会（資料 15）を中心とする学際性活性化活動（資料 16）は、単に多くの異質な分野の研究者が同一部局に存在するだけでは真の学際性にはつながらないとの反省の上に、委員会が構成員の研究関心等についての緻密なデータ収集を行い、また構成員が他の構成員の研究内容を知る機会を創出し、共同研究の可能なテーマを提案するなどを通じて、コーディネータの触媒活動を通じて学際性を活性化する試みである。この委員会の活動により、専攻の異なる教員が集まり特定のテーマで研究を行う多分野連携プログラム（資料 17、18）、異なる専門分野の研究に対して理解を深めための研究交流会であるマンスリー学際サロン（資料 19）、学術的興味関心を共有する教員がペアとなり互いの授業の一部で合流するファカルティ・カップリング（資料 20）、学際研究成果公表の場としての学際シンポジウムの開催（資料 21）を行った。また、院長裁量経費による萌芽的学際研究助成も実施し、新たな研究領域の開拓を目指す学際研究に助成（資料 22、23）を行った。上記の学際研究活動については、学際白書や人間環境学リファレンスとしてまとめた（資料 24）。

○資料 15　研究目的に沿った研究活動の状況

研究活動	研究実施状況
学際研究教育コーディネータ委員会を中心とする部局内での学際性の活性化活動	人間環境学府の理念である学際性のより一層の進展と実質化をはかるべく、学際教育プログラムの企画立案・支援をおこなう組織として「学際研究教育コーディネータ委員会」を設けた。コーディネータ委員会は、**内外の学際研究・教育のあり方について調査・研究**するとともに、**教員の研究テーマや学際的関心についてのアンケート及び個別的インタビューによる情報集積**にもとづいて、複数年で完結する「多分野連携プログラム」を企画・立案し、その試行を支援し、結果を検証する役割を担う。資料 17 にあるさまざまな企画を立案・実行することを通じて部局の学際性の活性化に取り組んだ。また平成 26 年度には、以上の活動を踏まえた、より**恒常的な学際性活性化の仕組みとしての「多分野融合コア構想」**を九州大学本部に対して提案した。
萌芽的学際研究助成	萌芽的学際研究助成とは、専攻間のコミュニケーションを通し、学びの共同体意識を活性化するため、**新たな研究領域の開拓を目指す萌芽的な学際研究に対して助成を行う**もの。少なくとも２コースもしくは２専攻に渡る複数名の教員による共同研究の企画が対象となる。資料 23、24 参照。
※教育の質向上支援プログラム（EEP） 平成 21 年度から実施している教育の質向上支援プログラム（EEP）は、中期目標・中期計画に掲げる教育に関する目標・計画の達成に資する部局等の主体的な取組を支援することにより、教員及び組織の教育力の向上を図り、本学の教育改革を推進することを目的とするものである。	

○資料 16　学際教育・研究コーディネータ委員会を中心とする学際性活性化活動

取　組	概　要
多分野連携プログラム	コーディネータ委員会は、**アンケート調査及び個別のインタビュー**を通して継続的に部局構成員の研究関心・テーマを調査し、その結果を**「人環マトリックス」**として提示した。それに基づいて、専攻を超えた教員個々人のより自由で流動的なつながりと協働を作り出すことによって、未踏な研究領域を探検することを主眼に置いた、新しい学問分野や新たな研究・教育体制作りの種を蒔く試みを行った。多分野連携プログラムは、そうしたシード作りの取り組みで、複数の取組が複数年にわたって試行された。資料 17 参照。
マンスリー学際サロン	部局構成員**各人の研究関心やテーマについて周知、共有する**目的で月に一度ランチタイムに、各専攻から一名の話者を選び、その研究テーマについて議論する場を設けた。資料 19 参照。
調査・研究	コーディネータ委員会は部局構成員の研究関心について調査し、部局内での共有をはかると同時に、**国内外の学際的取組の実際について調**

	査・研究し、その成果を逐次発表してきた。この点でのコーディネータ委員会の活動記録については資料 22 参照。
ファカルティ・カップリング	平成 26 年度からは新たに、研究関心を共有する異なる専攻の研究者の授業を相互乗り入れするファカルティ・カップリングの試行を開始した。資料 20 参照。
その他成果の公表	多分野連携の取組の実施報告等は、刊行物あるいはシンポジウムを通じて公表されている。また海外の学際研究・教育に関する研究書の翻訳も行った。資料 21、22 参照。

○資料 17　多分野連携プログラムの各取組概要

タイトル	メンバー	実施年度	概要
人間環境実践知の構築 ―人間と環境に働きかける技法と専門知の「あいだ」を考える―	安立清史・飯嶋秀治・岡幸江・菊地成朋・柴田建・高野和良・野村亮太・針塚進・南博文・野々村淑子	平成 22 年度	人間環境学という学問の可能性を考えるにあたり、人間と環境に働きかける知とはいかに可能か、つまり実践知としての人間環境学的知の構築を、学際的アプローチによって議論しようという試みである。葛藤、差異化や対立もありつつ、そこから融合、再構成されていく知の共同体を楽しむ。
人環の叡智で学校の危機を管理する	元兼正浩・増田健太郎・新谷恭明・有馬隆文・山口裕幸・中原浩之・志波文彦	平成 22 年度	学校における危機には実にさまざまなものがある。災害や事故もあれば、児童生徒、教職員の人間関係や倫理に関わる問題もある。その多様な側面に、教育学、社会心理学、臨床心理学、建築学などからの多彩な教授陣が多方向からアプローチする。
異分野交流・学際教育研究の促進される大学キャンパス	南博文・佐々木玲仁・杉山佳生・鶴崎直樹・飯嶋秀治・新谷恭明・田北雅裕	平成 22～24 年度	異分野交流、学際的な教育や研究が促進される大学キャンパスの環境とはどのようなものだろうか。様々な視点を持ち寄り、自由な発想を活かし、箱崎キャンパス、伊都キャンパスを主な題材にしてこの問題に取り組む。
建築災害と生理・心理	友清衣利子・蜷川利彦・大垣哲朗・前田潤滋・光藤宏行・山口裕幸・小山智幸・清家規・神野達夫	平成 22～26 年度	災害避難時に人はどのように行動するのか、工事現場での事故はなぜ起こるのか、施工環境の過酷さによる建築物の品質低下はいかにして防ぐのかといった、建築災害にまつわる人間の諸問題に建築学、生理学、心理学が連携して取り組む。
人間諸科学における『進化心理学』の位置	谷口秀子・橋彌和秀・濵本満・坂元一光・藤田雄飛・大津隆広・箱田裕司・土戸敏彦	平成 22 年度～	1980 年代以降、動物行動学、生物学の領域を中心に発達してきた『進化心理学』について哲学、人類学、発達心理学、ジェンダー論等のそれぞれの立場から批判的に評価し、それがそれぞれの学問にとってどのような意義をもちうるかをめぐって既存の人間諸科学と進化心理学との対話を試みる。
子どもや地域を犯罪から守るための異分野連携研究	有馬隆文・古賀靖子・柴田建・中村知靖・箱田裕司・濵本満・元兼正浩	平成 23～24 年度	犯罪リスクをめぐる課題は犯罪者となる人間の問題、犯罪を生む場や環境の問題など、多面的な要素がある。それらに対して異分野の研究者が連携して取り組むことで、これまでの縦割り的な研究では見いだせなかった新たな視座や方法を探究していく。
子どもの育ちを支える協同関係の構築に向けて～福祉と教育を結ぶ領域横断的基礎研究～	松崎佳子 ・田上哲・稲葉美由紀・田北雅裕・高野和良・岡幸江・柴田建・野々村淑子	平成 23 年度～	保護、養護、支援が必要とされる子どもの育ちを支える関係性とはどんなものだろうか。諸制度や取組の実態、またそれらの歴史的、社会的背景などについてさまざまな方向から光を当て、現場の実践者の方々との交わりも持ちつつ、多角的に課題を検討する。

学校トイレで多分野連携アプローチの可能性をさぐる～九大人環「学校トイレ」研究会～	元兼正浩・鈴木隆子・志波文彦・増田健太郎	平成 24～26 年度	学校のトイレは単なる学校施設の問題にとどまらず、子どもの教育や心理、健康面に関わる学際的な研究題材であるが、まだ取り組みが十分とは言えまない。そこで、各分野の教員と共に研究会や実地見学会などを通 して多分野連携アプローチの在り方をさぐる。
水俣を通じて人間と環境の関係を考える	飯嶋秀治・岡幸江・當眞千賀子	平成 25 年度	水俣病の問題は「水俣市」だけの問題でなければ、「過去」の問題でもない。その主たる原因は、当時玩具や衣類に用いられた塩化ビニールや香料や化粧品に用いられたオクタノールの原料アセトアルデヒドの生産触媒にしたメチル水銀であった。しかし、ある地域の環境全体が汚染されたとき、その被害は加害企業の家族にも及び、その企業の受益者は日本全国にいる。この構図は、福島でも同様である。だから、水俣病の問題を学びなおすことは、私たちの未来の人間環境を構築するうえでの糧になるのである。そういう構想の中で、いったい人間科学は、教育学は、建築学はどのような寄与ができるのだろうか。本他分野連携は、そうした問題を考える場にしていきたい。
共生社会のための心理学	内田若希・古賀聡・實藤和佳子・光藤宏行	平成 26 年度～	現代社会を理解するうえでダイバーシティ（多様性）という考え方は欠かせない要素の一つである。心理学は科学的なデータを重視し、複雑で多様な人の心を理解することをめざす学問です。人間環境学府の心理学は視覚情報処理、アスリートの心理、乳幼児の発達、心の問題への支援など、さまざまな領域を対象としています。それぞれの専門性や知見を持ち寄り、互いに刺激し合い高め合う学びの場を設けたい。
安全・安心への人間環境学的アプローチ	神野達夫・黒木俊秀・當眞千賀子・蜷川利彦・山口裕幸・志賀勉・藤田雄飛・田北雅裕	平成 27 年度～	近年、災害や事故、テロなど、安全・安心を脅かす要因は多様化している。人間環境学府の文理の枠を超えた教員の力を集めることによって「安全・安心な社会とはどのような社会なのか？」「安全・安心な社会を実現するために人間環境学ができることとは何か？」「社会の安心・安全について自ら考え、実行できる人材を育成するには、どのような教育が必要なのか？」といった問題に取り組む。
通学路の研究―家庭から校門までの長い道のり―	元兼正浩・南博文・志波文彦・田北雅裕	平成 27 年度～	校門を「希望の入口」と例えるのならば、通学路はその「希望の入口」に一歩一歩たどり着く「道」であると言える。本プログラムは、この「希望の入口」と「道」の問題へ、教育学のみではなく、社会学、都市計画学、心理学などの異なる分野との学際的な連携によってアプローチしていく。
臨床のセノグラフィー：舞台装置としての心理臨床空間	佐々木玲仁・末廣香織	平成 27 年度～	心理臨床実践においては、その場の物理的環境が大きく影響することは臨床家のあいだでは経験的に熟知されているが「どのような空間が心理臨床に最も適切なのか」という問いが議論されることは少ないのが現状である。当取組では、建築・臨床双方の観点を持ち寄って、室内から立地までの広い意味での面接環境を一種の舞台装置（セノグラフィー）と捉えて理想的な面接室について検討を行う。

○資料 18　多分野連携プログラム研究会等開催状況

年度	取組内容
平成 22 年度	・人間諸科学における『進化心理学』の位置 ４月 24 日　研究会開催（話題提供：橋彌和秀） ６月５日　研究会開催（話題提供：東京大学　坂口菊恵先生） ７月 13 日　研究会開催（話題提供：後藤晴子（院生）／清原一行（院生）／濵本満） ９月８日　研究会開催（話題提供：東京大学　長谷川寿一先生） 12 月 22 日　研究会開催（話題提供：土戸敏彦／宮川幸奈（院生）） ・人間環境実践知の構築 ５月 30 日　福祉社会学会のシンポジウムに参加 ６月 19 日　福祉社会学会のシンポジウムをふまえた合同研究会を開催 ・建築災害と生理・心理 ４月 15 日　キックオフミーティング、ワークショップ開催 ７月 13 日　建築現場見学会（博多駅） ９月 28 日　（社）日本建築学会九州支部災害委員会との合同研究シンポジウム開催 ・人環の叡智で学校の危機を管理する 前期を通じて授業内で実施（全 15 回）、報告書刊行 ・異分野交流・学際教育研究の促進される大学キャンパス ３月２日　学際コネクトミーティング開催
平成 23 年度	・人間諸科学における『進化心理学』の位置 ５月 10 日　研究会開催（話題提供：箱田裕司） ７月 26 日　研究会開催（話題提供：京都大学　平石界先生） １月 21 日　研究会開催（話題提供：京都大学　山本真也先生） ・子どもの育ちを支える協同関係の構築にむけて ４月６日　研究会開催（話題提供：松﨑佳子） ６月 15 日　研究会開催（話題提供：田上哲） ７月 25 日　研究会開催（話題提供：田北雅裕） ９月 27 日　研究会開催（話題提供：福岡市里親会会長・たんぽぽホーム代表理事　木村康三氏） 10 月 15 日　公開講演会及び研究会開催（講演：NPO 法人地域生活支援ネットワークサロン　日置真世氏） ・建築災害と生理・心理 ３月５日　ワークショップ開催（講演：大川技術士事務所　大川裕氏／大林組技術研究所　神代泰道氏／林直亨先生／日本大学　湯浅昇先生） ・子どもや地域を犯罪から守るための異分野連携研究 ７月６日　研究会開催（話題提供：有馬隆文／杉野弘明（院生）） 12 月 12 日　研究会開催（話題提供：東京大学　雨宮護先生） ３月 19 日　研究会開催（話題提供：筑波大学　荒井崇史先生） ・異分野交流・学際教育研究の促進される大学キャンパス
平成 24 年度	・人間諸科学における『進化心理学』の位置 成果論文集（濵本満編著『進化／文化』(『共生社会学論叢』 VIII 巻 九州大学大学院人間環境学府共生社会学講座発行）の刊行 ・子どもの育ちを支える協同関係の構築にむけて 12 月 15 日　公開講演会及び研究会開催(講演:特別養護老人ホーム鐘ケ丘ホーム　岡山隆二氏） ・建築災害と生理・心理 ２月 27 日　講演会開催（講演：工学院大学　村上正浩先生） ・子どもや地域を犯罪から守るための異分野連携研究 ７月 21 日　講演会開催（講演：福岡教育大学　小泉令三先生／福岡大学　大上渉先生） ・学校トイレで多分野連携アプローチの可能性を探る 11 月８日　研究会開催（話題提供：TOTO 株式会社　古川浩代氏） ・異分野交流・学際教育研究の促進される大学キャンパス
平成 25 年度	・人間諸科学における『進化心理学』の位置 ・子どもの育ちを支える協同関係の構築にむけて ・建築災害と生理・心理 ・学校トイレで多分野連携アプローチの可能性を探る ３月７日　研究会開催（話題提供：日本トイレ研究所　加藤篤氏） ・水俣を通じて人間と環境の関係を考える ５月７日　事前ディスカッション ５月 12 日　映像セミナー開催（トークゲスト：元 RKK 熊本放送、長崎県立大学　村

	上雅通先生／原田正純医師の長女　萬野利恵氏／水俣病センター相思社　永野三智氏／胎児性水俣病患者・「写真の中の水俣」出演　半永一光氏／NHK プラネット九州支社　吉崎　健氏） ５月 15 日　映像セミナーを受けてのディスカッション ５月 15-27 日　水俣福岡展 ５月 24 日　水俣福岡展を受けてのディスカッション
平成 26 年度	・人間諸科学における『進化心理学』の位置 ９月 29 日　研究会開催（話題提供：総合研究大学院大学　中尾央先生） ・子どもの育ちを支える協同関係の構築にむけて ９月 16 日　研究会開催（話題提供：山下亜紀子） 11 月７日　研究会開催（話題提供：SFD21JAPAN　小野本道治氏／SFD21JAPAN　宇薄拓海氏） ・建築災害と生理・心理 10 月 30 日　研究会開催（話題提供：東北大学　久田真先生） ・共生社会のための心理学 ４月 18 日　研究会開催（話題提供：ランカスター大学　Maki Rooksby 先生） ３月 23 日　ミニシンポジウム開催（話題提供：五位塚和也（院生）／総合臨床心理センター　細野康文／古川香（院生）／原田佑規（院生）／須﨑康臣（院生）／中村美穂（院生）／小松智子（院生）） ・学校トイレで多分野連携アプローチの可能性を探る 10 月 24 日　講演会開催（講演：NPO 法人日本を美しくする会　鍵山秀三郎氏）
平成 27 年度	・人間諸科学における『進化心理学』の位置 ７月 29 日　研究会開催（話題提供：自治医科大学　永澤美保先生） ・子どもの育ちを支える協同関係の構築にむけて ・安全・安心への人間環境学的アプローチ ・共生社会のための心理学 ・通学路の研究 ・臨床のセノグラフィー

○資料 19　マンスリー学際サロン開催記録

平成 22 年度	第一回　平成 22 年５月 27 日 12:00-13:00「共生社会システム論」飯嶋秀治（共生システムコース専攻） 第二回　平成 22 年６月 24 日 12:00-13:20「少なくとも最後まで歩かなかった」（二足のわらじで走り続けている理由）元兼正浩（教育システム専攻） 第三回　平成 22 年７月 22 日 12:00-13:30「コンクリートと人間環境」小山智幸（都市・建築学部門） 第四回　平成 22 年 10 月 28 日 12:00-13:00「高齢者介護サービス利用に関する意識について」高野和良（人間共生システム専攻） 第五回　平成 22 年 11 月 24 日 12:00-13:00「「養育する家族」そして「産み育てる女性」はどこからきたのか？」野々村淑子（教育システム専攻） 第六回　平成 22 年 12 月 15 日 12:00-13:00「地震による経済被害」清家規（都市共生デザイン専攻） 第七回　平成 23 年１月 26 日 12:00-13:00「風景構成法とその研究方法論」佐々木玲仁（実践臨床心理学専攻）
平成 23 年度	第一回　平成 23 年４月 27 日 12:00-13:00「鉄と木の環境共生住宅と次世代型学校建築」河野昭彦（空間システム専攻） 第二回　平成 23 年５月 25 日 12:00-13:00「学際的研究と教授法を再考する　－九州大学人間環境学府学際企画室における 18 ヶ月の勤務を期に－」ジェフ・ゲーマン（教育システム専攻） 第三回　平成 23 年６月 22 日 12:00-13:00「妖術の現代アフリカ：想像の呪縛と信念の社会問題化」濵本満（人間共生システム専攻） 第四回　平成 23 年７月 27 日 12:00-13:00「循環系の応答から分かること」林直亨（行動システム専攻） 第五回　平成 23 年 10 月 26 日 12:00-13:00「持続可能なまち　Walkable Neighborhood の研究」有馬隆文（都市共生デザイン専攻） 第六回　平成 23 年 11 月 24 日 12:00-13:00「教育達成と親族：全国家族調査 NFRJ データの分析」荒牧草平（教育システム専攻） 第七回　平成 23 年 12 月 21 日 12:00-13:00「３Ｄの科学　だまし絵を超真面目に考える」光藤宏行（行動システム専攻） 第八回　平成 24 年１月 25 日 12:00-13:00「大学空間の変容とキャンパスデザイン」鶴

	崎直樹（都市共生デザイン専攻）
平成 24 年度	第一回　平成 24 年５月 23 日 12:00-13:00「高校生の生活意識はどう変わったか　－30 年の軌跡－」荒牧草平（教育システム専攻） 第二回　平成 24 年６月 27 日 12:00-13:00「まなざしのなりたち：視線コミュニケーションの進化と初期発達」橋彌和秀（行動システム専攻） 第三回　平成 24 年７月 25 日 12:00-13:00「民・学協働による地域住環境点検・改善プログラムの構築　－北九州市枝光一区におけるまちづくり実践を通じて－」志賀勉（空間システム専攻） 第四回　平成 24 年 10 月 24 日 12:00-13:00「歴史の視点から香港の国民教育論争を論じる」エドワード・ヴィッカーズ（教育システム専攻） 第五回　平成 24 年 11 月 28 日 12:15-13:00 マッチング理論」鈴木譲（人間共生システム専攻） 第六回　平成 24 年 12 月 19 日 12:00-13:00「風景画に描かれた都市景観の解読」趙世晨（都市共生デザイン専攻）
平成 25 年度	第一回　平成 25 年５月 22 日 12:00-13:00「メルロ＝ポンティのソルボンヌ講義について」藤田雄飛（教育システム専攻） 第二回　平成 25 年６月 26 日 12:00-13:00「体験治療論について　～臨床動作法と臨床催眠法の実践から～」古賀聡（人間共生システム専攻） 第三回　平成 25 年７月 24 日 12:00-13:00「建築構造と持続・循環」山口謙太郎（空間システム専攻） 第四回　平成 25 年 10 月 23 日 12:00-13:00「「伝統」のつくり方、つなぎ方－日本三大吊るし飾りを訪ねて－」坂元一光（教育システム専攻） 第五回　平成 25 年 11 月 27 日 12:00-13:00「介護の「ガラパゴス化」を考える」安立清史（人間共生システム専攻） 第六回　平成 25 年 12 月 18 日 12:00-13:00「場としての「みんなの家」」末廣香織（空間システム専攻） 第七回　平成 26 年１月 22 日 12:00-13:00「ドゥルマ社会におけるキリスト教の変容」濵本満（人間共生システム専攻） 第八回　平成 26 年２月 19 日 12:00-13:00「ブロードウェイの精神分析」南博文（都市共生デザイン専攻）
平成 26 年度	第一回　平成 26 年４月 23 日 12:00-13:00「これまでの学際企画室　－学際研究・教育コーディネータ支援の歩み」大沼夏子（学際企画室）「近代女子教育の成立をめぐる日中関係史研究」董秋艶（学際企画室） 第二回　平成 26 年５月 28 日 12:00-13:00「授業分析と独特の思考・表現をする卓越した子ども」田上哲（教育システム専攻） 第三回　平成 26 年６月 25 日 12:00-13:00「『障害』があっても『生涯』Happy に　―パラ・スポーツの視点から―」内田若希（行動システム専攻） 第四回　平成 26 年７月 23 日 12:00-13:00「都市・建築のエネルギー・環境負荷削減に関する研究」住吉大輔（空間システム専攻） 第五回　平成 26 年 11 月 26 日 12:00-13:00「社会教育における“場”を考える」岡幸江（教育システム専攻） 第六回　平成 26 年 12 月 17 日（水）12:00-13:00「なぜ育児が苦しいのか―発達障害児の母親たちの語りから―」山下亜紀子（人間共生システム専攻） 第七回　平成 27 年１月 28 日 12:00-13:00「ここまでできる建築の科学」尾崎明仁（空間システム専攻）
平成 27 年度	第一回　平成 27 年６月５日 12:00-13:15「児童福祉とデザイン　～里親・児相・家族～　３つの実践～」田北雅裕（教育システム専攻）「ランニング時の生体応答に関する研究」増本賢治（行動システム専攻） 第二回　平成 27 年７月 22 日 12:00-13:15「鋼構造及び CFT 構造の接合部品質の安定化に向けた取組」松尾真太朗（空間システム専攻）「先行する学習が後続の学習を阻害する場合」久米弘（教育システム専攻） 第三回　平成 27 年９月 16 日 12:00-13:00「東南アジアにおける市街化の特徴」プラサンナ・ディビガルピティア（都市共生デザイン専攻） 「乱雑な空間パタンはヒトの内部でどのように処理されているのか？」山田祐樹（行動システム専攻）

○資料 20　ファカルティ・カップリング共同授業

平成 26 年度	第一組　三浦佳世（行動システム専攻）・山田祐樹（行動システム専攻） 実施日時：前学期 第二組　神野達夫（都市共生デザイン専攻）・松尾真太朗（空間システム専攻）

	実施日時：平成 26 年 11 月４日　13:00～18:10 第三組　元兼正浩（教育システム専攻）・志波文彦（空間システム専攻） 実施日時：平成 26 年 11 月 27 日　13：00-14：30 第四組　古賀聡（人間共生システム専攻）・光藤宏行（行動システム専攻） 実施日時：平成 26 年 12 月８日　16 時 40 分～18：10 第五組　田上哲（教育システム専攻）・住吉大輔（空間システム専攻） 実施日時：平成 27 年１月 27 日　19:00－20:50 第六組　高野和良（人間共生システム専攻）・岡幸江（教育システム専攻） 実施日時：平成 27 年２月 10 日　10:00～12:30 第七組　坂井猛（都市共生システム専攻）・山口謙太郎（空間システム専攻） 実施日時：平成 27 年３月 12 日　14：00～19：00

○資料 21　シンポジウムその他成果物

平成 22 年度	『人環シンポジウム 2010　学際的展開とコーディネータの取組』 ３月 23 日開催 ・学府長挨拶 ・教育の質向上支援プログラム紹介 ・多分野連携プログラム成果報告 ・萌芽的学際研究助成成果報告 ・人間環境学府同窓会連携企画「人環の学際性を考える　－在校生の視点・修了生の視点」 話題提供：小牧誉和（院生）／原田進也（院生）／愛媛大学　富田英司先生／群馬大学　西田純一先生／同窓会会長　出口隆氏
平成 24 年度	『学際シンポジウム 2013』 ３月 19 日開催 ・人間環境学府における学際的取組の紹介 学府長挨拶 　翻訳書籍「学際研究」紹介 　「人間環境学リファレンス」紹介 　多分野連携プログラム活動報告 ・「教えるということ：その起源を考える」 ※多分野連携プログラム「人間諸科学における『進化心理学』の位置の一環としての開催 話題提供：慶應大学　安藤寿康先生／野々村淑子／京都大学　高田明先生／京都大学　山本真也先生 成果刊行物 濵本満編著『進化／文化』(『共生社会学論叢』 VIII 巻 九州大学大学院人間環境学府共生社会学講座発行)(多分野連携プログラム取組「人間諸科学における『進化心理学』の位置」成果論文集)
平成 25 年度	『学際シンポジウム 2014　教育・福祉・コミュニティ:「若者」からせめぎあうその境界』 ２月 21 日開催 ※多分野連携プログラム「子どもの育ちを支える協同関係の構築に向けて」の一環としての開催 話題提供:法政大学　平塚眞樹先生／NPO 法人北九州ホームレス支援機構　奥田知志さん

○資料 22　萌芽的学際研究助成一覧

年度	代表者	採択課題名	助成額
平成 22 年度	野々村 淑子	学際的教育研究の社会への還元に関する最新動向に関する研究	600 千円
	志波　文彦	実大実験にもとづいた文教施設の管理･運営手法に関する研究	500 千円
平成 23 年度	志波　文彦	文教施設の耐震化に対する施設利用者の印象評価と啓発活動による防災意識の変化	700 千円
	飯嶋　秀治	フィールド人間環境学プログラムことはじめ	700 千円
平成 24 年度	該当者なし	―	―
平成 25 年度	末廣　香織	留学生の生活環境とコミュニケーションを改善するアクションリサーチ-生活実態の把握と交流空間「香椎浜みんなの家」の企画・設計・製作・活用を通じて	1000 千円

平成 26 年度		該当者なし	
平成 27 年度	下地　貴樹	省エネルギー教育における実践的態度形成に関する研究	500 千円
	藤原　直子	「学級教室」を検証する－教員、児童・生徒の活動や心理を視点として－	500 千円

○資料 23　萌芽的学際研究助成取組内容

平成 22 年度 萌芽的学際研究に対する研究助成、野々村淑子・光藤宏行他、「学際的教育研究の社会への還元に関する最新動向に関する研究」	学際的教育研究の社会への還元に関する最新動向を調べる教育学、心理学、都市建築学等多分野の研究者による共同調査。
平成 23 年度 萌芽的学際研究に対する研究助成、光藤宏行他、「文教施設の耐震化に対する施設利用者の印象評価と啓発活動による防災意識の変化」	文教施設の耐震化に対する施設利用者の印象評価を考慮に入れた都市建築学、心理学双方の研究者による共同実験。
平成 23 年度 萌芽的学際研究助成、飯嶋秀治・関一敏・柴田建、フィールド人間環境学ことはじめ	水俣病の問題は「水俣市」だけの問題でなければ、「過去」の問題でもない。その主たる原因は、当時玩具や衣類に用いられた塩化ビニールや香料に用いられたオクタノールの原料アセトアルデヒドの生産触媒にしたメチル水銀であった。ある地域の環境全体が汚染されたとき、その被害は加害企業の家族にも及び社会がねじれをかかえるようになる。本報告書では、直接的な水俣病の背景にあるこうしたねじれを丁寧に聞き、まとめた文化人類学、宗教学、都市・建築学の研究者による共同研究。

○資料 24　学際教育研究コーディネータ委員会報告書・出版物

平成 22 年度	『学際白書 2009』　コーディネータ委員及び学際企画室が調査した、国内機関の学際的取組、海外機関の学際的取組の報告を掲載。また、学際的教育研究について理解を深めるため実施した研究会の報告、及び平成 22 年度より実施予定の多分野連携プログラムの趣旨等を掲載。
平成 24 年度	『人間環境学リファレンス 2012』　人間環境学府の全教員の自己紹介集。ほとんどの原稿を学生によるインタビューで作成。また、教員の研究の位置づけを「人間－環境」「理論－実践」「文系－理系」の三軸で示す「人間環境学マトリクス」を掲載。 『学際研究　プロセスと理論』(九州大学出版会)　アレン・F・レプコの著書を翻訳し出版。授業科目「学際研究論」のテキストとして採用。
平成 26 年度	『人間環境学リファレンス 2014』 平成 24 年度刊行の『人間環境学リファレンス 2012』を教員の自己紹介ページをカラー化するなどのアップデートを加えて刊行。また、この内容を web 上に「人間環境学教員マトリクス」として展開。
平成 27 年度	『人間環境学リファレンス 2015』　前年度刊行の『人間環境学リファレンス 2014』をアップデートして刊行。Web の「人間環境学教員マトリクス」もあわせてアップデート。 『学際白書 2016』　平成 22 年度から実施した学際研究活動記録集。「多分野連携プログラム」、「マンスリー学際サロン」、「ファカルティ・カップリング」、「学際シンポジウム」の実施報告が掲載。

（水準）

期待される水準を上回る

（判断理由）

論文・著書等の研究業績や学会での研究発表の状況については、安定した研究発表状況にあるといえ、専門分野における卓越した研究成果を発信し続けるという研究成果に関する方針に従って活動を行っている。また、競争的資金等の受入状況については、科学研究費補助金の採択率が高く、他の競争的資金などの受入件数や金額も高い水準にある。外部資金による研究実施状況では、科研費を中心とする各専門分野における中核的及び先端

的研究が活発に行われていると同時に、共同研究・受託研究を通じて産業界や地域社会、各省庁と連携した研究活動がなされており、関係者の期待に応えている。

こうした専門領域での活発な研究活動に加えて、専門性を超えた学際研究の活性化のために学際研究教育コーディネータ委員会を設置し、多分野連携プログラムなど第１期中期目標期間にはない新たな取組を行い、学際的テーマによる科研費採択など着実に成果を上げている。

以上により、リサーチポリシーに基づいた取組や活動の状況が優れていることから、本研究院で想定する関係者の期待される水準を上回ると判断できる。

分析項目Ⅱ　研究成果の状況

観点２－１　研究成果の状況

（観点に係る状況）

２－１－（１）　研究院の組織単位で判断した研究成果の質の状況

受賞件数は平均 12.5 件であり、第１期中期目標期間の平均 2.6 件と比べると５倍となっており、構成員の研究が学界、第三者によって高い評価受けていることを示している（資料 25）。特に全国レベルで顕著な受賞としては、教育学分野における「日本教育経営学会実践研究賞」「日本教育行政学会功労賞」、社会学・文化人類学分野における「日本文化人類学会賞」、心理学分野における「日本心理学会優秀論文賞」「日本基礎心理学会優秀論文賞」「日本発達心理学会 学会賞」「日本心理臨床学会奨励賞」「日本グループ・ダイナミックス学会優秀論文賞」、建築学分野における「日本風工学会・日本風工学会研究奨励賞」「日本デザイン振興会・グッドデザイン金賞（被災地支援活動の建築プロジェクト[みんなの家]）」「空気・調和衛生工学会論文賞」「日本建築学会教育賞」がある（資料 26、27、28）。

また、都市・建築学部門による「ハビタット工学」は、「海外での問題解決型フィールド調査」を通じた人材養成、海外諸大学との連携や国連ハビタット・アジア太平洋事務所との連携強化などを通じて、社会貢献という点でも関係者の期待に応えた（資料 29）。

○資料 25　受賞の状況

平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平均
8	10	11	11	17	18	12.5

○資料 26　受賞リスト

年度	受賞者	受賞名	対象論文等
平成22年度	八尾坂修	九州大学表彰	研究活動の活性化に多大な貢献
	山本健太郎、三浦佳世	日本視覚学会平成 22 年夏季大会ベストプレゼンテーション賞	「高次視覚段階における運動処理は時間知覚を伸張させる」
	末廣宣子、末廣香織	**日本建築学会・作品選奨**	志井のクリニック
	末廣宣子、末廣香織	日本建築学会九州支部・建築九州賞　住宅部門　作品賞	むさしヶ丘の住宅
	近藤潤一（前田研究室）	**平成 22 年度日本風工学会優秀修士論文賞**	強風下での平板状物体の初期飛散状況に及ぼす固定力の影響に関する研究
	牧野起八（山口研究室）	日本コンクリート工学協会・九州支部長賞	コンクリート系非構造壁の取り付け部に介在させる摺動材を用いた摩擦制振システムの開発研究
	松本侑也（小山研究室）	日本コンクリート工学協会・九州支部長賞	暑中コンクリート工事における品質管理に関する研究-実大模擬実験による長期強度及び耐久性の検討-
	木下寛子（南研究室）	日本質的心理学会第７回大会最優秀発表賞	ある小学校のフィールドワークを通した雰囲気の考察：「様相」・「とどまること」・「返照」をめぐって
平成23年度	八尾坂修	九州大学表彰	研究活動の活性化に多大な貢献
	元兼正浩、金子研太、清水良彦、波多江俊介、畑中大路、前田晴男、山下顕史、雪丸武彦、揚川、李昱輝	**実践研究賞（日本教育経営学会）**	対象研究課題〉「校長の専門職基準」を活用した新任校長研修プログラムの共同開発
	縄田健悟、山口裕幸	日本グループ・ダイナミックス学会平成 23 年度優秀学会発表賞（ショートスピー	「内集団からの協力期待が集団間代理報復に及ぼす影響：賞賛獲得を求めた集団間報復」

		チ部門）	
	友清衣利子	**日本風工学会・日本風工学会研究奨励賞**	強風による住家建物被害の拡大に及ぼす影響因子の抽出法に関する試み－強風被害発生要因の分析への構造物特性指標の利用例－
	志賀勉	NPO 法人 日本都市計画家協会・第９回日本都市計画家協会賞　優秀まちづくり賞・福岡支部賞・日本まちづくり大賞（最優秀賞）	やまさかコミュニティの協働まちづくり（団体受賞：やまさか暮らし研究会／代表幹事：志賀勉）
	末廣香織、他	**日本デザイン振興会・グッドデザイン賞**	観光船埠頭［長崎港松が枝国際観光船埠頭］
	志賀 勉	地域づくりネットワーク福岡県協議会・平成 23 年度ふくおか地域づくり活動賞奨励賞（協議会長賞）	やまさかコミュニティの協働まちづくり（団体受賞：やまさか暮らし研究会／代表幹事：志賀勉）
	末廣宣子、末廣香織	福岡県・福岡県美しいまちづくり賞　住宅の部　大賞	むさしヶ丘の住宅
	石野 智慎（前田研究室）	平成 23 年度日本風工学会優秀修士論文賞	突風を受ける構造物に作用する風力・風圧力のオーバーシュート現象の数値流体解析
	米谷裕希（小山研究室）	日本コンクリート工学協会・九州支部長賞	暑中環境下で製造、運搬されるコンクリートの温度推定式に関する研究　－推定式中の係数 α、β、θr に関する実機実験－
平成24年度	縄田健悟、山口裕幸	**日本グループ・ダイナミックス学会優秀論文賞**	「個人間の危害行動が集団間紛争へと拡大するとき：一時集団における集団間代理報復の萌芽的生起」
	佐々木恭志郎、山本健太郎、三浦佳世	日本基礎心理学会第 31 回大会優秀発表賞	「数の大きさの経時的変化は時間知覚を変容させる」
	末廣香織、ほか	**日本デザイン振興会・グッドデザイン金賞**	被災地支援活動の建築プロジェクト［みんなの家］
	松下直幹、李霽憲、吉田健一、赤司泰義、住吉大輔、宮田征門、田中誠、藤村昌弘	**空気・調和衛生工学会論文賞学術論文部門**	「空調用熱源システムの部分負荷運転制御法の開発と導入効果の検証」空気調和・衛生工学会論文集
	九州大学大学院人間環境学府 都市共生デザイン専攻、空間システム専攻	**日本建築学会・平成 24 年日本建築学会教育賞（教育貢献）**	アジアの都市問題に取組む「ハビタット工学」教育プログラムの開発・実践・展開
	松尾 真太朗	日本建築学会九州支部・建築九州賞（新人賞）	２方向加力を受ける外ダイアフラム形式角形鋼管柱梁接合部の降伏耐力に関する考察
	山口謙太郎	Best Presentation Award, First International Conference on HABITAT Engineering and Design, Tongji University, Shanghai, China, International Society of Habitat Engineering and Design	Development of Damping System Using Friction-Resistant Dry-Masonry Wall - Proposal of the Construction Method which Controls a Slipping Layer and Horizontal Loading Test of the Wall and Frame Specimen.
	松尾真太朗	日本鋼構造協会・JSSC 鋼構造シンポジウム・アカデミーセッション平成 24 年度優秀発表賞	外ダイアフラム形式角形鋼管柱梁接合部段違いパネルの力学的挙動
	志賀勉	北九州市・平成 24 年度北九州市表彰（まちづくり功労）	やまさか暮らし研究会の活動（団体受賞：やまさか暮らし研究会／代表幹事：志賀勉）
	李鶴、趙世晨、王大強	First International Conference on HABITAT	A Study on Comprehensive Urbanization Level and

		Engineering and Design, International Society of Habitat Engineering and Design ベストペーパー賞	Classification of Cities in China
	米谷裕希（小山研究室）	日本建築学会九州支部・建築新人賞	暑中コンクリートの運搬中の温度上昇に関する研究-その８　運搬時における簡易な温度解析手法の検討-
平成25年度	佐々木恭志郎、山田祐樹、三浦佳世	日本基礎心理学会第32回大会優秀発表賞	「感情形成における画像認知と身体動作の遡及的統合」
	菊地梓、山口裕幸	日本グループ・ダイナミックス学会平成25年度優秀学会発表賞（ロングスピーチ部門）	「想定外の困難に直面した組織の迅速な復旧を支える要因の検討：宮城県女川町の企業を対象とした調査」
	古賀　聡	**日本心理臨床学会奨励賞**	「心理劇によるアルコール依存症者の対人構築と将来展望への援助（2011）心理臨床学研究第29巻第２号掲載」、「解決志向アプローチにもとづいたアルコール依存症者への心理劇（2011）心理臨床学研究第29巻第４号掲載」
	坂倉真衣、南　博文	日本質的心理学会・種まきウサギ賞（日本質的心理学会第 10 回大会ポスター発表）最優秀賞	博物館における子どもと展示空間及び展示物との「出会い」のプロセスについて
	池田竜輔（松尾研究室）	日本建築学会「優秀卒業論文賞」	左右の梁せいが異なる外ダイアフラム形式柱梁接合部の力学性能評価
	宇都宮明翔(志賀研究室)	五三会設計競技・10選	「建築と地球の関係について」
	宇都宮明翔(志賀研究室)	キルコス国際建築設計コンペ・佳作	「見えること／見えないこと」
	武田将平（志賀研究室）	日本建築学会設計競技・支部入選	「高架下でつながるまち」
	大坪和広（前田研究室）	平成25年度日本風工学会優秀修士論文賞	突風を受ける切妻屋根建物の非定常風荷重に関する研究
	大坪和広（前田研究室）	平成25年度日本建築学会九州支部・建築九州賞（新人賞）	ステップ関数的突風を受ける切妻屋根建物の屋根面周りの非定常風圧力に及ぼす屋根勾配の影響
	中島草太（小山研究室）	日本コンクリート工学協会・九州支部長賞	暑中環境に施工される構造体コンクリートの品質管理に関する研究
平成26年度	八尾坂修	**日本教育行政学会功労賞**	多年にわたる教育行政研究の発展に貢献。理事５期（15年）、研究推進委員長、単著『アメリカ合衆国教員免許制度の研究』(風間書房、1998年)、編著『教員人事評価と職能開発・日本と諸外国の研究』(風間書房、2005年)、いずれも国の刊行助成図書。
	山田祐樹、佐々木恭志郎、三浦佳世	日本認知心理学会第12回大会優秀発表賞	「法と空間心理学－法廷配置と利き手が生み出す量　刑判断バイアス－」
	山本健太郎、崔原齊、三浦佳世	**日本基礎心理学会優秀論文賞**	「視覚的触感に触覚情報が及ぼす影響」
	實藤和佳子	九州心理学会優秀発表賞	身体動作模倣の発達を支える要因は何か―他者意図理解からの検討
	實藤和佳子	**日本発達心理学会　学会賞**	非合理的事象は幼児の誤信念理解を促進するか：自己の驚きを手がかりとした心的状態の推論
	末廣香織、末廣宣子	日本建築学会九州支部・建	かざぐるまの家

		築九州賞　住宅部門　作品賞	
	田井佑典、住吉大輔、赤司泰義、桑原康浩、上田憲治、二階堂智、立石浩毅、松尾実	空気調和・衛生工学会九州支部支部長賞	「シミュレーションを用いた熱源システムの性能管理に関する研究第２報　シミュレーションを用いた不具合検知法及び実測値の比較による不具合検知法」
	神里侑志（山口研究室）	日本コンクリート工学会「九州支部長賞」	乾式工法で組積した補強コンクリートブロック壁の面外曲げに対する力学特性
	土井彰人（志賀研究室）	日本建築学会設計競技・全国入選	「建て替わり継ぐ、基町高層アパート」
	土井彰人（志賀研究室）	キルコス国際建築設計コンペ・佳作	「軽いこと／重いこと」
	土井彰人（志賀研究室）	くまもとアートポリス平成26 年度国際学生設計コンペ・最優秀賞	「丘に集う」
	池田竜輔、竹内卓也、壇泰朗、牟犇、松尾真太朗	第22回　鋼構造年次論文報告集発表会アカデミーセッション優秀発表賞	段差を有する外ダイアフラム形式CFT柱梁接合部の力学的挙動
	Andini Radisya Pratiwi、趙世晨	The 9th International Symposium on City Planning and Environmental Management in Asian Countries, AURGベストペーパー賞	The Relationship between Users Satisfaction and The Perceived Accessibility at Pedestrian Spaces on Festival Day An Applied Study of Structural Equation Modeling （SEM）,
	片村祥吾（小山研究室）	日本コンクリート工学協会・九州支部長賞	フライアッシュ外割混合コンクリートの耐硫酸性及び耐硫酸塩性に関する研究
	片村祥吾（小山研究室）	日本建築学会九州支部・建築新人賞	フライアッシュ外割混合モルタルの耐硫酸性及び耐硫酸塩性に関する研究
	浦山侑美子（堀研究室）	トウキョウ建築コレクション平成26年度グランプリ受賞	「関東大震災における建築物被害報告に関する一考察」
	浦山侑美子（堀研究室）	日本建築学会九州支部・建築新人賞	「関東大震災における建築物被害報告に関する一考察－周辺史料を通して見る『百号報告』の信憑性」
平成27年度	八尾坂修	**日本教育経営学会功労賞**	多年にわたる教育経営学の発展に貢献、理事５期（15年）、国際交流委員長２期（６年）、The *Educational Administration and Management in Japan*, Cengage Learning Asia Ote Ltd, 2008 （編集責任者）
	濵本 満	**第10回日本文化人類学会賞**	『信念の呪縛―ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』（平成26年、九州大学出版会）を代表作とする人類学的理論構築に関する一連の業績
	麻生美希	日本都市計画学会 北海道支部研究発表会 支部長賞	農業を基幹産業とした自治体における観光まちづくりにかんする研究～北海道美瑛町における観光マスタープラン策定を通じて～
	縄田健悟、山口裕幸、波多野徹、青島未佳	**日本心理学会優秀論文賞**	「企業組織において高業績を導くチーム・プロセスの解明」 心理学研究, 85, 529-539.
	須﨑康臣、杉山佳生	九州体育・スポーツ学会奨励論文賞	自己調整学習と体育授業に対する適応との関連、九州体育・スポーツ学研究、29（2）、2015年３月

	Yamazaki, M. & Uchida, W.	3rd prize of poster's contest	The case study of sports mental training for boccia athletes (VISTA Conference)
	Yun Bai & Kazuo Kato	Excellent paper of graduate students, the third prize The 18th National Academic Congress of Psychology of China （中国語：中国第 18 届全国心理学学术会议、优秀研究生论文三等奖（博士））	白雲・加藤和生.（2015）. Attachment-Styles Differences in the Structure of the Self-Model 、異なる愛着タイプの自己モデルの構造の差（日本語）、不同依恋类型在自我模型的结构上的差异（中国語）、中国第十八届全国心理学・学术会议优秀研究生论文三等奖 ″（2015 年 10 月 18 日、中国天津）
	錢 琨、光藤宏行	第 7 回錯視コンテスト入賞	格子による圧縮変形錯視
	錢 琨、光藤宏行	日本基礎心理学会第 34 回大会優秀発表賞	格子による圧縮変形錯視,日本基礎心理学会第 34 回大会
	佐々木恭志郎、山田祐樹、黒木大一朗、三浦佳世	日本基礎心理学会第 34 回大会優秀発表賞	密集体への不快感は空間周波数に基づくのか？
	秋保亮太、縄田健悟、池田浩、山口裕幸	日本グループ・ダイナミックス学会優秀発表賞	秋保亮太・縄田健悟・池田浩・山口裕幸 （2015）. チームで振り返ることにより促進される暗黙の協調：協調迷路課題を用いた実験的検討 日本グループ・ダイナミックス学会第 62 回大会 （奈良大学）
	末廣香織、末廣宣子	日本建築学会・作品選奨	行橋の住宅
	末廣香織、ほか	**日本デザイン振興会・グッドデザイン賞**	大学［福岡女子大学施設整備第１期］
	Mahmud Kori Effendi、財津周平、河口弘光、河野昭彦、蜷川利彦、松尾真太朗、津田惠吾、城戸將江、窪寺弘顕	日本建築学会九州支部「優秀新人賞」	″Experimental Investigation of the Influence Factors on the Behavior of CFT Members under Impact Load and Proposal for the Analysis Model Part 3. FEM Analysis- Static Loading of Vacant Steel Tubular and CFT Members,″ 日本建築学会九州支部研究報告 54 号、平成 27 年３月
	石本一貴、森隆太、林孝之、遠藤由貴	日本建築学会設計競技・支部入選	「ひらかれる都市の裏側」
	中野雄貴、伊藤杏里、前野眞平、谷口和広	日本建築学会設計競技・支部入選	「墓守の景」
	下村帆美、長崎春菜、高橋昂平、北村晃一	日本建築学会設計競技・支部入選	「浄化の礎」
	田安未奈、尾崎明仁	空気・調和衛生工学会九州支部長賞受賞	「高断熱土壁住宅を対象とした温度自動開閉窓の省エネルギー最適制御に関する研究」

○資料 27　組織単位での研究成果の質の高さを示す論文等

研究者	タイトル	掲載誌	研究概要（研究内容、外部からの評価等）
縄田健悟・山口裕幸（2011）	「個人間の危害行動が集団間紛争へと拡大するとき：一時集団における集団間代理報復の萌芽的生起」	実験社会心理学研究, 51, 52-63.	本研究では、初対面の一時集団においても、集団間代理報復の生起が見られるか否かを検討した。勝者が敗者に罰金を与えるというルールの一対一対戦ゲーム場面による実験室実験を行い、実験室における一時集団であっても、集団間代理報復の萌芽的形態が見られた。この論文は、平成 23 年度日本グループ・ダイナミックス学会優秀論文賞を受賞した。
濵本満（2014）	信念の呪縛：ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌	九州大学出版会 2014	30 年にわたるフィールドワークの成果であり、妖術信仰の呪縛の仕組みと、植民地行政とのかかわりを論じた点で独自の視点を切り開いている。図書新聞その他の書評（４本）

			でも取り上げられ、賞賛を得た。また本書により、平成 27 年 5 月 31 日に**第 10 回日本文化人類学会学会賞**を受賞した。
Sugimoto T, Kobayashi H, Nobuyoshi N, Kiriyama Y, Takeshita H, Nakamura T, Hashiya K. (2010)	Preference for Consonant Music over Dissonant Music by an Infant Chimpanzee	Primates	行動実験に基づいて、生後５か月のチンパンジー乳児が協和音楽を不協和音楽よりも好むことを世界で初めて示した。国内ばかりでなく、英国 BBC をはじめ、世界的なニュースとなった。学外研究者、動物園との共同研究の成果であるとともに、研究組織単位（中村知靖教授・橋彌和秀准教授）での連携の成果と言える。
古賀聡 (2011)	「心理劇によるアルコール依存症者の対人構築と将来展望への援助」 「解決志向アプローチにもとづいたアルコール依存症者への心理劇」	心理臨床学研究第 29 巻第 2 号（2011） 心理臨床学研究第 29 巻第 4 号（2011）	社会的にも注目され重要な学問領域であるとされる臨床心理学分野であるが、国内におけるアディクション（アルコール使用障害、薬物使用障害）に対する臨床心理学的アプローチに対する研究は極めて少ない。また認知行動療法やカウンセリングなど言語を媒介とした臨床心理学的アプローチのみが注目されているが、本論文ではアクション・メソッドと呼ばれる心理劇を用いた支援について取り組み、その成果を報告した。この二本の論文により**日本心理臨床学会奨励賞**を受賞した。
Meng & Hashiya (2014)	“Pointing Behavior in Infants Reflects the Communication Partner’s Attentional and Knowledge States: A Possible Case of Spontaneous Informing. “	PlosONE	行動実験に基づいて、１歳前半の赤ちゃんが、相手の知識や注意の状態を推測したうえで、その相手が「知らない」と推測されるものを選択的に指さして自発的に「教えている」可能性を示した。研究成果は日本経済新聞、朝日新聞（紙面＋デジタル版）、毎日新聞（紙面＋デジタル版）、Yahoo!ニュース、goo ニュースなどで報道されるなど、高い社会的関心を集めた。九州大学における研究成果の代表例として、KYUDAI NEWS No.26 (2015 Spring) にも概要が掲載された。
山本健太郎・崔原齊・**三浦佳世** (2014)	視覚的触感に触覚情報が及ぼす影響	基礎心理学研究, 33, 9-18.	本研究では、画像から喚起される視覚的触感に触覚情報が及ぼす影響を検討した。触覚情報が視覚的触感の判断に影響を及ぼすことを示し、さらにその影響が評定レベルではなく、感覚処理レベルで生じていることを明らかにした。本論文は、**日本基礎心理学会優秀論文賞**を受賞した。
實藤和佳子 (2014)	Development of preference for conspecific faces in human infants	Developmental Psychology	ヒトの社会的認知は、多様な環境から“自分と似た存在”としてヒトに選択的注意を向けることに始まると仮定されてきた。実際、ヒトは生後すぐ顔配列を長く注視するが、顔配列の中でヒトの顔の重要性が増す時期は明らかでなかった。そこで、生後１、３ヵ月児を対象にヒトとサルの顔写真を用いて検討した結果、乳児は１ヵ月時点でヒトとサルを区別できるが、ヒトという種全般への選好は３ヵ月の間に形成されることが分かった。 本知見は、発達心理学における国際的な一級紙 Developmental Psychology に掲載された。
縄田健悟・山口裕幸・波多野徹・青島未佳 (2015)	「企業組織において高業績を導くチーム・プロセスの解明」 心理学研究, 85, 529-539.	心理学研究, 85, 529-539.	論文は、平成 27 年度**日本心理学会優秀論文賞**を受賞した。これまでの心理学領域における研究では実現されていなかった多数の企業組織における 160 を超すチームを対象にした大規模調査研究によって、通説的にしか主張されてこなかったチームコミュニケーションがチーム業績に与える影響の大きさを実証的

			に確認するとともに、その特性についても解明することで、心理学研究の発展に寄与したことが評価された。
Sasaki, K., Yamada, Y., & Miura, K.（2015）	Post-determined emotion: Motor action retrospectively modulates emotional valence of visual images.	Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences	画像を見て生じた感情が、直後に画面を上にスワイプすると快くなり、下にスワイプすると不快になるという現象を明らかにした研究で極めて評価の高い国際誌に掲載され、さらにプレスリリースが行われ、日経バイオテクを始め、科学などのオンライン情報として流れ、普及効果につながった。
Mahmud Kori Effendi（2015）	Experimental Investigation of the Influence Factors on the Behavior of CFT Members under Impact Load and Proposal for the Analysis Model Part ３. FEM Analysis-Static Loading of Vacant Steel Tubular and CFT Members	日本建築学会九州支部研究報告 54 号、平成 27 年 3 月	衝撃荷重を受けるコンクリート充填鋼管及び中空鋼管の損傷を FEM 解析で予測した. **日本建築学会九州支部「優秀新人賞」**
松下直幹、李霽憲、吉田健一、赤司泰義、住吉大輔、田中誠、藤村昌弘（2011）	空調用熱源システムの一次ポンプ余剰圧力活用制御法の開発と検証	空気調和・衛生工学会論文集	**空気・調和衛生工学会論文賞学術論文部門受賞**

○資料 28　組織単位での研究成果の質の高さを示す学会報告等

研究者	タイトル	学会名	研究概要（研究内容、外部からの評価等）
山本健太郎・三浦佳世（2010）	「高次視覚段階における運動処理は時間知覚を伸張させる」	日本視覚学会	日本視覚学会平成 22 年夏季大会ベストプレゼンテーション賞
李　明香 尾崎明仁（2010）	不均一熱環境を考慮した建築系と人体系の連成シミュレーション	平成 22 年度日本建築学会近畿支部研究報告	平成 22 年度日本建築学会近畿支部若手研究者プレゼンテーション賞
夜久幸希 尾崎明仁（2011）	家庭用 SOFC-CGS の性能評価に関する研究 その１　システム概要と数理モデル化	平成 23 年度空気調和･衛生工学会近畿支部研究報告	平成 23 年度空気調和・衛生工学会近畿支部学術研究発表会奨励賞
小林愛里 尾崎明仁（2011）	熱・水分・空気の複合移動を考慮した緑陰の数理モデル化と環境評価に関する研究	平成 23 年度空気調和･衛生工学会近畿支部研究報告	平成 23 年度空気調和・衛生工学会近畿支部学術研究発表会奨励賞
重森康太郎 尾崎明仁（2011）	太陽光を利用した Smart EcoEnergy House に関する研究	平成 23 年度空気調和･衛生工学会近畿支部研究報告	平成 23 年度空気調和・衛生工学会近畿支部学術研究発表会奨励賞
井上玄規 尾崎明仁（2012）	民生家庭部門のエネルギー消費量の将来予測 その２　戸建住宅と集合住宅のエネルギー消費量の推移	平成 24 年度空気調和･衛生工学会大会学術講演梗概集	平成 24 年度空気調和・衛生工学会大会優秀講演奨励賞

縄田健悟・山口裕幸 （2011）	「内集団からの協力期待が集団間代理報復に及ぼす影響:賞賛獲得を求めた集団間報復」	日本グループ・ダイナミックス学会	平成23年度優秀学会発表賞（ショートスピーチ部門）
山口謙太郎 （2012）	Development of Damping System Using Friction-Resistant Dry-Masonry Wall - Proposal of the Construction Method which Controls a Slipping Layer and Horizontal Loading Test of the Wall and Frame Specimen -	First International Conference on HABITAT Engineering and Design	Best Presentation Award, First International Conference on HABITAT Engineering and Design, Tongji University, Shanghai, China, International Society of Habitat Engineering and Design
松尾真太朗 （2012）	外ダイアフラム形式角形鋼管柱梁接合部段違いパネルの力学的挙動	日本鋼構造協会・JSSC鋼構造シンポジウム・アカデミーセッション	平成24年度優秀発表賞
李鶴、趙世晨、王大強 （2012）	A Study on Comprehensive Urbanization Level and Classification of Cities in China.	First International Conference on HABITAT Engineering and Design	International Society of Habitat Engineering and Design ベストペーパー賞
菊地梓、山口裕幸 （2013）	「想定外の困難に直面した組織の迅速な復旧を支える要因の検討:宮城県女川町の企業を対象とした調査」	日本グループ・ダイナミックス学会	平成25年度優秀学会発表賞（ロングスピーチ部門）
佐々木恭志郎・山田祐樹・三浦佳世 （2013）	感情形成における画像認知と身体動作の遡及的統合	日本基礎心理学会第32回大会	優秀発表賞
坂倉真衣、南 博文	博物館における子どもと展示空間及び展示物との「出会い」のプロセスについて	日本質的心理学会	日本質的心理学会第10回大会ポスター発表）最優秀賞
山田祐樹・佐々木恭志郎・三浦佳世 （2014）	法と空間心理学－法廷配置と利き手が生み出す量刑判断バイアス－	日本認知心理学会第12回大会	優秀発表賞（社会的貢献度評価部門）
Andini Radisya Pratiwi, 趙世晨 （2014）	The Relationship between Users Satisfaction and The Perceived Accessibility at Pedestrian Spaces on Festival Day An Applied Study of Structural Equation Modeling （SEM）.	The 9th International Symposium on City Planning and Environmental Management in Asian Countries	AURG ベストペーパー賞
實藤和佳子 （2014）	身体動作模倣の発達を支える要因は何か―他者意図理解からの検討	九州心理学会	優秀発表賞
田井佑典、住吉大輔、赤司泰義、桑原康浩、上田憲治、二階堂智、立石浩毅、松尾実 （2014）	シミュレーションを用いた熱源システムの性能管理に関する研究 第２報　シミュレーションを用いた不具合検知法及び実測値の比較による不具合検知法	空気調和・衛生工学会	空気調和・衛生工学会九州支部支部長賞
麻生美希 （2015）	農業を基幹産業とした自治体における観光まちづくりにかんする研究～北海道美瑛町における観光マスター	日本都市計画学会 北海道支部研究発表会	北海道支部長賞

	プラン策定を通じて～		
Yamazaki, M. & Uchida, W.（2015）	The case study of sports mental training for boccia athletes	VISTA Conference	3rd prize of poster's contest
錢 琨、光藤宏行（2015）	格子による圧縮変形錯視	日本基礎心理学会第 34 回大会	優秀発表賞
佐々木恭志郎、山田祐樹、黒木大一朗、三浦佳世（2015）	密集体への不快感は空間周波数に基づくのか？	日本基礎心理学会第 34 回大会	優秀発表賞
秋保亮太、縄田健悟、池田浩、山口裕幸（2015）	チームで振り返ることにより促進される暗黙の協調:協調迷路課題を用いた実験的検討	日本グループ･ダイナミックス学会第 62 回大会	優秀発表賞
田安未奈、尾崎明仁（2015）	高断熱土壁住宅を対象とした温度自動開閉窓の省エネルギー最適制御に関する研究	空気･調和衛生工学会	九州支部長賞

○資料 29　組織単位での研究成果の質の高さを示すその他の研究活動

研究者	タイトル	研究概要（研究内容、外部からの評価等）
九州大学大学院人間環境学府 都市共生デザイン専攻・空間システム専攻（2012）	アジアの都市問題に取組む「ハビタット工学」	都市・建築の持続化は、アジア等の人口増加・成長都市と日本・欧州等の人口減少・成熟都市の双方で要請されるグローバルな課題である。両専攻では 21 世紀 COE をはじめとするこれまでの教育研究の実績を活かして、「持続都市建築システム」の教育研究を強化する「ハビタット工学」の新たなプログラムを開拓し、日本人はもとよりアジアからの留学生を広く受け入れ、アジア各地の主要大学との連携を図りながら、アジアの都市 問題の課題解決を担う優れた専門家や研究者の育成を目指した。本プログラムの報告「アジアの都市問題に取組む「ハビタット工学」教育プログラムの開発・実践・展開」（平成 24）は、日本建築学会教育賞（教育貢献）を受賞している。

２－１－（２）　研究院の研究成果の学術面及び社会、経済、文化面での特徴

学術面では、「妖術信仰と信念の生態学」に関する文化人類学研究、「ポスト罹災地とのつきあい方」に関する社会学研究、「中国における市民権教育」に関する教育学研究、「身体化認知」、「乳幼児期の社会的認知」、「チーム・マネジメント」、「アクション・メソッドによるアルコール使用障害治療」といった心理学研究、「大相撲に関する歴史」に関するスポーツ科学研究、「組積造建築の力学的挙動解明と最適な耐震補強法の開発」、「強風による住家建物被害の拡大に及ぼす様々な影響因子を用いた被害予測手法」といった建築構造研究、「恒温恒湿性能を備えた自然エネルギー利用パッシブ住宅の開発と住環境評価」に関する建築環境研究、「3DCG の活用による風景画に描かれた都市景観の比較」といった建築計画研究、「古代ローマ都市遺跡ポンペイ、オスティアに関する建築・都市史」といった建築歴史研究など人間並びに人間を取り巻く環境に関し、専門分野における卓越した研究成果を発信している（資料 30）。

また、社会、経済、文化面では、「インターンシップの評価枠組みに関する研究」、「児童福祉施設における暴力問題の理解と対応」に関する研究が行われており、教育現場並びに福祉現場からの評価が高く、研究成果を社会に還元するという特徴もある（資料 31）。

○資料 30　研究成果の学術面での特徴を示す研究成果

研究者	タイトル	研究概要	外部からの評価
濵本満（2014）	『信念の呪縛：ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』九州大学出版会 2014 単著	「『信念の呪縛』はドゥルマ社会の妖術信仰と実践を研究対象とした「信念の生態学」に関する民族誌である。執拗なまでに細部に拘った記述を通して、浜本氏は妖術という信念の性格について、そもそも「信じる」という行為が語られ、可能になる条件を論理的に検討しながら、ドゥルマの妖術もまた些細な出来事を契機として「自己を再生しつづけていく巨大な物語装置」であると同時に、この巨大な物語装置は些細な出来事で停止する可能性をもつ信念であることを看破してゆく。そして、妖術に呪縛されない浜本氏自身の信念をドゥルマの妖術信念への対抗言説として用いながら、現代社会における信念の在り方についての議論を一般読者にも分かりやすい形で提示することに成功している。」（第 10 回文化人類学会賞受賞理由 http://www.jasca.org/onjasca/award/award.html より）	30 年にわたるフィールドワークの成果であり、妖術信仰の呪縛の仕組みと、植民地行政とのかかわりを論じた点で独自の視点を切り開いている。図書新聞その他の書評（4 本）でも取り上げられ、賞賛を得た。また本書により、平成 27 年 5 月 31 日に第 10 回日本文化人類学会学会賞を受賞した。
飯嶋秀治（2016）	社会的排除とのつきあい方―日本の児童養護施設における臨床心理学と文化人類学の連携	『文化人類学』77（2）：273-293	田嶌誠一（臨床心理学）・當眞千賀子（発達心理学）との学際研究であり、原著著者以外の他の論文や書籍（木村周平ら編平成 26『災害フィールドワーク論』古今書院）に引用されている。
Paul Morris, Naoko Shimazu and Edward Vickers (eds) (2013)	Imagining Japan in Post-war East Asia: Identity politics, schooling and popular culture. London and New York: Routledge	In the decades since her defeat in the Second World War, Japan has continued to loom large in the national imagination of many of her East Asian neighbours. While for many, Japan still conjures up images of rampant military brutality, at different times and in different communities, alternative images of the Japanese 'Other' have vied for predominance – in ways that remain poorly understood, not least within Japan itself. *Imagining Japan in Postwar East Asia* analyses the portrayal of Japan in the societies of East and Southeast Asia, and asks how and why this has changed in recent decades, and what these changing images of Japan reveal about the ways in which these societies construct their own identities. It examines the role played by an imagined 'Japan' in the construction of national selves across the East Asian region, as mediated through a broad range of	This book has been widely, and positively, reviewed in major journals - including *Comparative Education Review*, *Compare*, *Comparative Education* and *Pacific Affairs*. The reviewer in *Pacific Affairs*, for example, hailed it as a 'valuable contribution to the literature on the formation of national identity in East Asia', while *Comparative Education Review* called it a 'rare intellectual treat'. Although still very new, the book has already been cited in major works on Japan and East Asia. For example, it is cited as 'recommended reading' on Japan's international relations by R. Taggart Murphy in his recent book *Japan and the Shackles of the Past* (Oxford: Oxford University Press, 2014), p.

		media ranging from school curricula and textbooks to film, television, literature and comics. Commencing with an extensive thematic and comparative overview chapter, the volume also includes contributions focusing specifically on Chinese societies (the mainland PRC, Hong Kong and Taiwan), Korea, the Philippines, Malaysia and Singapore. These studies show how changes in the representation of Japan have been related to political, social and cultural shifts within the societies of East Asia – and in particular to the ways in which these societies have imagined or constructed their own identities.	420.
Morris, P. & Edward Vickers (2015)	'Schooling, Politics and the Construction of Identity in Hong Kong: the "Moral and National Education" Crisis in Historical Context,' *Comparative Education* Vol.51 （３）:305-326	Since Hong Kong's retrocession, the government has endeavoured to strengthen local citizens' identification with the People's Republic of China - a project that acquired new impetus with the 2010 decision to introduce 'Moral and National Education' (MNE) as a compulsory school subject. In the face of strong local opposition, this policy was withdrawn in 2012, and implementation of MNE made optional. This article seeks to elucidate the background to the MNE controversy of 2012 by locating the emergence of a distinctive Hong Kong identity in its historical context, and analysing successive official attempts (before and after the 1997 retrocession) to use schooling for purposes of political socialisation. We argue that the school curriculum has projected and reflected a dual sense of identity: a 'Chineseness' located mainly in ethno-cultural qualities, and a 'Hongkongeseness' rooted in civic attributes. While reinforced by schooling, local civic consciousness has been intimately related to a tradition of public activism strongly evident since the 1970s, and further strengthened post-1997.	This is the most frequently downloaded of all the articles in the current issue of Comparative Education - having already been read over 350 times (more than double the number for the next 'most read' article). In recognition of my work on citizenship and identity in contemporary China (especially Hong Kong) - though not specifically this article - I was invited to give the keynote address at a symposium on 'Chinese civic consciousness' organised by Harvard University in Shanghai last December.
Sasaki, K., Yamada, Y., & Miura, K.	Post-determined emotion: Motor action retrospectively modulates	人間の感情が身体運動によって後から修正可能であることを実験により示した。身体状態や身体運動から感情状態を調整するような新たな情報呈示、展示、精神的健康の維持とい	国際的に評価の高い専門誌 *Proceedings of the Royal Society B: Biological Sciences* に掲載。プレスリリースによる波及効果（日経バ

(2015)	emotional valence of visual images.	ったさまざまな目的での幅広い応用も期待できる。	イオテクなど)。
三浦佳世(2014)	感情形成における画像認知と身体動作の遡及的統合	感情を伴う画像を観察後、画面に提示される指示に従い、手を上もしくは下に動かす動作を行った後、画像の感情価を判断させたところ、手を上に動かした条件では下に動かした条件よりも、感情価がポジティブな方向にシフトした。この結果は、上とポジティブあるいは下とネガティブという空間と価値のメタファの関係を示すとともに、感情価は視覚と体性感覚とのポストディクティブ(事後的)な統合によって影響されることを明らかにしたものである。	指導学生の佐々木恭史郎を筆頭とする学会発表が日本基礎心理学会第31回大会発表賞を受賞した。
三浦佳世(2011)	Kansei as mental activity: Comprehensive perception, intuitive judgment and the basis of creativity	感性を、印象を伴う包括的な知覚、直感的な判断、創造の基礎を担う心の働きとして捉え、古代ギリシャ語のアイステーシス(広義の知覚)の観点を紹介し、総合的視点からの心の全人的理解のアプローチのひとつとして、実証科学としての感性認知学の構築を提案した。なお、感性の定義、歴史、文化との関係、知覚との関係、美学との関係などについても考察を行う。(editorial として書かれたもので、原文にはアブストラクトはついていない。また、英文にて書かれている。)	日本の心理学分野から始めて海外に向けて情報発信された「感性」に関する本格的な研究紹介であり、日本心理学会の国際誌 Journal of Japanese Psychological Research の特集号の editorial として書かれたものである。感性の定義、歴史、知覚との関係、文化との関係、エステティクス(美学)との関係など、アイステーシス(広義の知覚)の立場を取りつつ、幅広い観点から深く考察を行った。なお、特集号には脳科学、心理物理学、感性評価、認知科学分野の11本の国内外の論文が掲載され、そのうちの一本に、自身の研究論文(日本庭園を材料とした感性知の研究)も含まれている。
Sanefuji, W., Wada, K., Yamamoto, T., Mohri, I., & Taniike, M. (2014)	Development of preference for conspecific faces in human infants. Developmental Psychology, 50, 979-985	乳児が示す他者への社会的関心の発達的起源と発達時期を特定した研究	発達心理学領域の権威ある Developmental Psychology に掲載された。
縄田健吾, 山口裕幸, 波多野徹, 青島美佳(2015)	企業組織において高業績を導くチーム・プロセスの解明, 心理学研究, 85, 529-539.	これまでの心理学領域における研究では実現されていなかった多数の企業組織における 160 を超すチームを対象にした大規模調査研究によって、通説的にしか主張されてこなかったチームコミュニケーションがチーム業績に与える影響の大きさを実証的に確認するとともに、その特性についても解明した。	心理学研究の発展に寄与したことが評価され、2015 年度の日本心理学会優秀論文賞を受賞した。
古賀聡(2011)	「心理劇によるアルコール依存症者の対人構築と将来展望への援助(2011)心理	「解決志向アプローチにもとづいたアルコール依存症者への心理劇(2011)心理臨床学研究第 29 巻第 4 号掲載」とともに、心理臨床の学術上優秀であり研究奨励に値するもの	一般社団法人日本心理臨床学会は会員数約２万５千人の国内における心理学関連学会のなかで最大の会員を有する学会である。日本心理臨床学会

	臨床学研究第29巻第２号掲載	と認められ、心理臨床学会の定める「学会賞及び奨励賞の贈呈に関する規定」第２条第２号に基づき、日本心理臨床学会奨励賞を受賞した。	学会誌に掲載された２本の論文が心理臨床の学術上優秀であると評価された点は優れた業績と判断できると思われる。 社会的にも注目され重要な学問領域であるとされる臨床心理学分野であるが、国内におけるアディクション（アルコール使用障害、薬物使用障害）に対する臨床心理学的アプローチに対する研究は極めて少なく、また認知行動療法やカウンセリングなど言語を媒介とした臨床心理学的アプローチのみが注目されるなか、アクション・メソッドと呼ばれる心理劇を用いた支援について取り組み、その成果を報告した点も顕著な研究活動と評価される。また、受賞については一般社団法人日本心理臨床学会の公式ホームページに私の受賞のコメントとともに掲載された。
西村秀樹（2012）	角界モラル考 －戦前の大相撲は「おおらか」だった －，不昧堂出版	相撲節会の「故実」に後付けされた「神事性」に偏向した大相撲観から抜け出し、戦前における「祝祭」としての「おおらかな」大相撲の姿を提示しいる。勝って土俵上で踊る力士、物言いをつけ自分の進退をかけて検査役に迫る力士、部屋を脱走する力士、酒を二升も三升も飲んで土俵に上がる力士など。それが日中戦争以降大東亜戦争を含めた「聖戦」を経るなかで現在のモラル尽くめの大相撲に向かって行く経緯を示した画期的な研究である。	「スポーツ社会学研究」で書評に掲載された。
前田潤滋（2010）	Aerodynamic damping properties of two transmission towers estimated by combining several identification methods	強風時における送電線の振動性状に及ぼす風力の影響を実測といくつかの力学理論の組み合わせによる応答計算に基づいて精査したもので、風速増大に伴う空力減衰の増加と電線の変形増大による幾何学的剛性の増大が相互に関連して支持鉄塔に及ぼすメカニズムを解明した.	掲載誌は風工学分野の国際ジャーナルとして特に高い品質を誇るもので、３名の査読者から、いずれも Excellent の評価を得、採択となった.
前田潤滋（2010）	建築の構造力学	建築学の初学者を対象に構造力学理論を解説したものである. 著者３名	構造力学の解説書は数多く存在するが、有限要素法の入門となる「マトリックス変位法」を含んだ数少ないテキストである.
前田潤滋（2011）	Wind pressure measurement of a flat roof body under a rapid change of reference static pressure	流体力学分野で以前より知られている「流速急変に伴う流体力の急激な変化」に着目して、風洞内に短時間に立ち上がる突風の生成法を新たに考案し、種々断面形状物体に及ぼす突風による風力増加の現象を新たな視点で解明した。本研究はステップ	突風を受ける構造物の風力が、短時間ではあるが、定常な風速を受けた場合の風力より数倍大きな風力が発生することを独自の実験手法で解明した。風洞の脈動流発生装置に新たな工夫を加えることに

	in a gust wind tunnel	関数型の突風の生成と、突風発生時の急激な圧力変動が空気力天秤などの風力計測装置に及ぼす影響を回避するためのいくつかのアイデアから始まり、それまでの突風生成法に比べて画期的な特徴は、脈動流を生成する翼列を独自の工夫で制御することによって、比較的大きな模型を設置できる１．５m×１．５mの風洞断面内に、模型位置で突風を０．２秒～５秒の立ち上がり時間で生成できることである。このことが突風に固有な風力に強く影響している各種パラメータの影響を精査可能ならしめた。物体に突風を作用させたときの風力を測定し、ゆっくり立ち上がった突風では見られないが、急変した突風では瞬間的に大きな風力が発生することを風洞実験で実証したものである。	よって、種々パラメータを調整できるステップ関数型の突風の生成を可能にし、水槽実験などで従来から知られていた、流速の急変に伴う流体力の増大現象を風洞実験での再現に成功した。計測法の工夫や自然の突風との類似性を明らかにして、被害突風風速の推定に資する重要な知見を与えており、竜巻やダウンバーストによる被害対策への利用が期待できる。また、これら一連の研究に関連して、風速場のシミュレーション法や送電鉄塔の耐風補強法などが、建築学や風工学の関連誌で数多く提案され、実用化している。
友清衣利子（2011）	強風による住家建物被害の拡大に及ぼす影響因子の抽出法に関する試み-強風被害発生要因の分析への構造物特性指標の利用例	社会科学分野で用いられる数量化手法を用いて、質的資料である構造種別などの構造物特性を指標化することで耐風性能の定量的な評価手法を可能とし、強風被害に影響を及ぼす様々な要因の中から、特に強い影響を及ぼす院試を選別する手順を工夫することで、実際の被害状況により対応した住家被害率を算定する手法を提案した。	当該論文は建築分野で評価の高い建築学会誌に掲載されたもので、論文に関する研究業績によって平成22年度日本風工学会研究奨励賞を受賞した。
Myonghyn ag LEE, Akihito OZAKI, Yuko KUMA（2014）	Numerical Simulation on Hygrothermal Environment of Whole Buildings Taking into Account Complete HAM Features, Transaction on Control and Mechanical Systems, Transaction Series on Engineering Sciences and Technologies, 3, 52-58	自然エネルギーを利用し恒温恒湿性能及び夏季除湿と冬季集熱の機能を備えるパッシブ住宅の設計を目的として、工業建材を主とする最近の乾式住宅にも適用可能な蓄熱･調湿(夏季は除湿）の特性を有する環境制御システムを開発している。自然エネルギーや躯体の蓄熱・調湿作用を利用して住環境を制御するパッシブ技術は、機械制御の効率化（省エネルギー）を目途に断熱気密のみを優先した最近の乾式住宅に自然制御（恒温恒湿性能）を付加することになり、建築性能の新基準（省エネルギー基準の改正）及び新たな建築構法・仕様の開発に繋がるものと期待される。	新成長戦略（2010年６月閣議決定）に則った独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構の 2011 年度～2013 年度及び 2014 年度～2015 年度「太陽熱エネルギー活用型住宅の技術開発」事業、及び2015年度「戦略的省エネルギー技術革新プログラム」事業に採択されている。
趙世震（2010）	都市計画	都市計画に関する専門知識を全般的に解説している.	シリーズ〈建築工学〉７として出版されており、数多くの大学は都市計画講義の教科書として採用されている.
趙世震（2010）	ベルナルド･ベロットが描いた風景画の構図と修復に活用された経緯	18世紀イタリア景観画家のベルナルド・ベロットが描いた絵画の分析を通じて、その構図及び都市景観修復への活用経緯や方法を明らかにした.	科研Aの助成を受けて行われた研究で、ドイツ・ピルナ市役所等での発表を通じて、現地の政府関係者に高く評価され、新聞等で報道された.
堀賀貴（2010）	Drainage System of the rainwater and the excess	古代ローマの都市ポンペイについて、道路に下水処理の機能があったことを示した論文。レーザースキャ	EAA（ヨーロッパ考古学協会）の国際会議で発表され高い評価を受け、2012年に論文集の

	water discharged on the streets of Pompeii	ニングという測量技術をつかって、詳細な道路面の実測データを積み上げることによって証明した。	１編として、イギリスにて出版された。
堀賀貴（2010）	ポンペイとオスティアの切石積み壁体をレーザースキャニングする：壁体と街路の関係性について	イタリアの二大古代ローマ都市、ポンペイとオスティアにおけるレーザースキャニングの結果から、街路計画と公共建造物の壁体の配置に関連性を見いだしたもの。	11 月 15 日から 21 日まで開催された連続国際シンポジウム「ポンペイとオスティア古代ローマ都市研究の最前線」における基調講演の一つ。同シンポジウムを企画、運営し、基調講演を行った。イタリアよりオスティア遺跡監督所長を含め３名の著名な考古学者、イギリスよりオックスフォード大学、ケント大学の研究者を招聘して、一般公開でディスカッションを行った。なお、本論文は調査報告書として英文で出版され、世界の主要研究所、大学の図書館に収蔵されている。
堀賀貴（2015）	Yoshiki Hori and L. Lavan, THE POTENTIAL OF LASER SCANNING FOR THE STUDY OF ROMAN BUILDINGS, in L. Lavan ed. “Field Methods and Post-Excavation Techniques in Late Antique Archaeology “, Brill, 2015, pp.595-660.	英国 Leverhulme 財団の助成により客員教授として英国ケント大学に赴任し、その講義録として出版された。	英国財産の招聘資金であること、またレーザースキャニングの考古学への応用とその実践について連続講義、セミナーを実施した国際貢献は大きい。また、英国を代表するレスター大学、オックスフォード大学、ロンドン大学、サウサンプトン大学での特別講演は特筆に値する。その講義録は平成 27 年に表記のとおり出版された。

○資料 31　研究成果の社会、経済、文化面での特徴を示す研究成果

研究者	タイトル	研究概要	外部からの評価
吉本圭一（2010）	インターンシップの評価枠組みに関する研究－高校における無業抑制効果に焦点をあてて－	インターンシップの普及･多様化に伴って必要とされる職業･社会への移行に関わるキャリア教育としての評価枠組みの探究を目的とし、これまでの評価枠組みの議論を再考した。多くが、個々人の内的特性だけを扱い、教育方法との関連についての探究が欠け、組織としてのキャリア教育的な機能の考察が不足しているという限界を有している。そこで、デューイの「連続性」と「相互作用」という「経験による教育」の評価原理の適用について考察し、高校におけるインターンシップの全国調査データを再分析した結果、インターンシップの無業抑止効果が普通科高校で強く表れていた。それは、インターンシップの計画段階から確認されるもので、個人の能力形成というよりも組織のキャリア教育の力であり、具体的には、体験的な進路指導活動の実施と関連した総合的な無業等抑止効果として説明可能である。また、インター	高等教育におけるキャリア教育・職業教育の核としてのインターンシップの実施の工夫改善についての実践事例は多数蓄積されているが、教育の成果に関する実証的な研究が乏しく、これを全国的な調査データによって検証した点で優れた業績と判断される。また、この研究成果をもとに、キャリア教育において最も影響力の大きい日本進路指導協会主催、第 60 回進路指導研究協議全国大会（300 名の参加）の基調講演を依頼され平成 23 年 7 月にその実施をしたほかに、１年間で福岡県、長崎県、熊本県、宮崎県、大分県、奈良県、高知県など多数の進路指導・キャリア教育に係る依頼講演を行った。また、

		ンシップの内容的な充実(長期化や参加生徒数増加など)も重要な課題であるが、その「無業者等」率抑制効果は職業専門学科よりも普通科で大きいことが明らかになった。さらに、インターンシップ導入に伴うキャリア教育の充実という「相互作用原理」、より充実したインターンシップへの継続・発展という「連続性原理」の重要性も確認された。	平成23年度先導的大学改革推進委託事業の応募において、核となる理論的な研究成果となっており、九州大学が委託事業採択される重要な要素となった。
田嶌誠一（2011）	『児童福祉施設における暴力問題の理解と対応』(金剛出版)	児童養護施設等における暴力･虐待問題を解するための安全委員会方式を考案し､全国18施設で実践し、研究した。 臨床心理学の田嶌､発達心理学の當眞千賀子､人類学の飯嶋秀治の人間環境学研究院の３人の教員による学際的協同によるものである。	北海道から九州に至る全国 18施設で導入・実践され、成果を上げている。導入施設は毎年、増え続けている。 導入施設を中心に「全国児童福祉安全委員会連絡協議会」を結成し、平成 21 年より毎年、全国大会を開催している。毎回、報告書を発行している。 愛知県では､平成24年に「安全委員会導入推進委員会」中央児童相談所に設置された。 平成27年より､名古屋市のNPO法人CAPNAによる安全委員会方式研修会を年２回開催。 専門誌の書評（『児童青年精神医学とその近接領域』､『臨床心理学』）でも高い評価を受けている。また『施設内虐待を許さない会』からも「現存する唯一の解決法である」との評価を受けている。(学術面へも記載)

（水準）
期待される水準を上回る

（判断理由）
研究成果の質の状況については、受賞件数が、平均約 12.5 件であり、第１期中期目標期間の平均と比べると４倍となっており、本研究院構成員の研究が学界、第三者によって高い評価受けていることが分かる。また、「ハビタット工学」は、海外諸大学との連携や国連ハビタット・アジア太平洋事務所との連携強化などを通じて、社会貢献という点でも関係者の期待に応えている。

研究成果の学術面及び社会、経済、文化面での特徴については、人間並びに人間を取り巻く環境に関する問題について専門分野の観点から多様な研究を行うとともに、教育現場並びに福祉現場に関わる研究も行っており、研究成果の社会還元にも力を入れている。

さらに、上記の研究はいずれも学会などでの受賞あるいは教育・福祉現場において全国レベルでの展開につながっており、外部から高い評価を得ている。

以上により、リサーチポリシーの実現の観点から見て、研究成果の状況が優れており、本研究院で想定する学協会、産業界、地域、省庁関係者の人間と環境に関わる諸問題を研究し、その成果を基づいた社会貢献という期待に十分に応えており、さらに第１期中期目標期間と比べ受賞に関して質と量の面で向上が見られることから、期待される水準を上回ると判断できる。

Ⅲ　「質の向上度」の分析

（１）分析項目Ⅰ　研究活動の状況

第２期中期目標期間においては、部門の高度な専門性を越えた、部門横断的な学際性の活性化の一連の取組を通して、学際性の追究という点で第１期中期目標期間にはなかった顕著な質的向上が見られた。とりわけコーディネータ委員会（資料 16、13～14 頁）のサポートで動いている多分野連携プログラム（資料 17、14～15 頁、資料 18、16～17 頁）においては、常時、部門専攻を超えた５から６の研究チームが共同の研究会や調査活動を実施している。また月に一回開催の「マンスリー学際サロン」（資料 19、17～18 頁）による個々の研究院構成員の研究内容や関心の共有の場も中断なく続いており、こうした取組の成果は、学際的なテーマでの科研費申請や成果発表といった形で実を結んでいる。

（２）分析項目Ⅱ　研究成果の状況

第１期中期目標期間と比べ、受賞数が４倍に増加しているのが特徴である（資料 25～26、22～26 頁）。また、数だけでなく、受賞内容も全国レベルで評価されているものが多く、本研究院構成員が行う研究の質の高さを示しており、質的に大きな変化があったと言える。